

緑谷出久の中の人

アニメ勢

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある男が緑谷出久に憑依するも失敗！

前世の記憶は9割破損！

しかもご本人の人格は健在！

こうして緑谷出久は強制二人羽織になってしまったのだ!!

目次

| | |
|----------------|-----|
| 緑谷出久：オリジン | 1 |
| 試験開始 | 4 |
| スタートライン | 7 |
| 爆豪勝己：オリジン | 24 |
| 屋内対人戦闘訓練 | 34 |
| 爆豪 v s 轟 | 38 |
| U S Jにて迷子のお知らせ | 56 |
| 広場での戦い | 65 |
| 平和の象徴 | 84 |
| 事件が終わって | 99 |
| 閑話：緑谷とクラスメイト | 106 |
| 雄英体育祭：障害物競争 | 112 |

| | |
|----------------|-------|
| 雄英体育祭：騎馬戦（裏面） | 124 |
| 雄英体育祭：決勝トーナメント | 緑谷 v |
| s 心操 | 131 |
| 雄英体育祭：決勝トーナメント | 麗日 v |
| s 爆豪 | 144 |
| 雄英体育祭：決勝トーナメント | 緑谷 v |
| s | 157 |
| 雄英体育祭：決勝トーナメント | 轟 v s |
| 爆豪 | 170 |

緑谷出久：オリジン

緑谷出久にはもう一人の僕がいる。

僕が無個性だとわかった次の日急に生えてきたのだ。初めは凄く、それはもう凄く喜んだ。無個性だと絶望してどん底にいたら個性が発現したんだから。

でも、彼曰く個性ではないらしい。無個性脱却を果たしたらすぐさま無個性に逆戻りするというジェットコースターを味わい、僕は泣き喚いてしまった。でもしょうがないじゃないか。突然体の中にまったくの別人格がニョキつとしてきたら誰でも個性だと思うに決まってる。

絶望で首吊る寸前だった僕と、なぜかとても荒れていた彼は三日三晩にわたり喧嘩した。

心の中で罵詈雑言の嵐が吹き荒れ、左腕が勝手に動いてタコ殴りにし、一人二役で喚き散らす。

それを見た母さんが発狂しながら止めに入ったことは今では三人の笑い種になっている。

そんなこんなで僕も彼も落ち着きを取り戻し話し合いを始めたんだ。憑依失敗やら

特典がどののと言って半分以上何を言っているのかわからなかったけどね。ともかく、彼は一体何なのかを聞いた後、僕の現状を彼に話したんだ。

そこで彼は言った。僕を変える一言を。

——それで？ お前は どうするんだ出久？

どうするって、何が。

——ヒーローになるのを諦めるのかって聞いてんだよ

そ、それは……。

——うーむ、諦めムードなのか出久ちゃん

だって、しょうがないじゃないか。僕は無個性で、何のとりえもない木偶の坊なんだから。

——……ま、お前がそう思うんならそうなんだろうよ。でも俺はもつたいたいと思
うぜ

もつたいたいってなんだよ……。

——だって、お前はまだ何もしてないんだぜ？ 始める前に諦めてちやなるもんも

ならないだろうよ

……。

——一つ聞かぜ、緑谷出久。お前が憧れたものは、憧れた人は、そう簡単に手放していいものなのか？

……。

——なあ出久、雄英高校って知ってるか？

え、うん。もちろん知ってるけど何でそんなこと知ってるの？

——それは一先ず置いて、だね。その校訓知ってるか？

知ってるけど……。プルスウルトラ、でしょ？

——そう！ そうなんだよ出久！ プルスウルトラ、更に向こうへ！

——今ここが！ お前が超えるべき壁なんだ！ ヒーローになりたいんだらう！？

諦めるには眩しすぎる背中なんだらう！？ じゃあこんなところで、スタートラインに立つ前で足踏みしてる場合じゃないだらう！

——更P l u s U l t r aに 向U l t r aこうへ!! お前は、ヒーローになれるさ!!

これが僕の、僕たちの始まり。僕たちのオリジンだ。

試験開始

ヒーロー科のある高校で最も名の知れているといつても過言ではない超名門高校、その入学試験を僕は受けている。

今は説明が終わって実技試験が始まるのを他の受験生と待っている。準備運動をしてる人、近くの人としゃべって緊張をほぐそうとしてる人、皆様々だ。その中で僕は、目を閉じて深呼吸をしている。

——おいおい、脈拍上がってんぞ緊張しすぎ。

それはしょうがない。だって今僕は倍率300倍を超える超難関校の試験を受けてるんだよ？ 緊張しないほうがおかしいって。

——緊張で何もできませんでした、なんてことだけは止めてくれよ？ お前には後がないんだからよ。てか専願するのはいいけどよ、他校を受験しないとか何なの？ 鍛錬のし過ぎでおかしくなっちゃった？

失敬な僕は真面目だよ。他に受けないのは後を絶つてやる気を出すためだって何回もいったよね？ それと君は心配しすぎ。僕たちが10年をかけた研鑽があるんだ、大丈夫だって。

それに、僕たちはもう無個性じゃないしね。

「はいスタートオー！」

その言葉を聞いた瞬間、僕は走りだす。他の受験者は皆動いていないように、プレゼントマイクに何か言われている。

先頭を走っていると影が見えた。全体的に緑系統の色合いをしていて肩には大きく1の数字が書かれている。説明にあった1ポイント仮想敵^{サイラン}だ。彼我の距離はさほどなく、このまま行けばすぐにも衝突する。でも僕の目にはすべてがスローモーションに見える。それに、これまでの思い出も。

もう1人の僕と出会ったこと、通信教育から始まった師匠と出会ったこと、師匠から言い渡された鍛錬が地獄で死にかけてしたこと、師匠が家にやってきてゴコゴコにされたこと、師匠のお兄さんに半殺しにされたこと。

碌な思い出がねえ。

——でも、そのおかげで敵を前にしても立ち竦んでない。あの化け物ジジイ共に感謝……は別にいいか、むしろ死ぬ

彼の言葉に思わず笑ってしまう。元トップヒーローと比べるのは流石に酷くないか

な？　そして、最後に思い出すのは、この10か月間のトップヒーローとの猛特訓。体が熱が灯る。その熱は体中をめぐるいき、頭のとっぺんからつま先まで熱が行き渡っていく。

そして、バチバチという音と雷光の様な輝きと共に力が沸き上がる。

許容上限　5%フルカウル

勢いそのまま飛び上がり、仮想敵との距離を0にする。

「まずは、1ポイント!!」

僕の飛び蹴りは敵の頭部をブチ破った。

——ヒヤア！　駆けつけ1杯、まずは死ねえ！

「それ、駆けつけ3杯の誤用だよ」

——……マジで？

スタートライン

フルカウルを維持したまま試験会場を駆け巡る。今の僕はかのトップヒーローの力、その一端を使えている。それはたった5%だけど、あの人の5%はたったそれだけでも半端ない力をもたらしている。ぶっちゃけ拳法を使うまでもない。1ポイントも2ポイントも3ポイントも、漏れなく普通のパンチで一撃だ。

余裕がありすぎて他の人を助けたり、協力してヴィランを倒したりしている。途中でガタイのいいメガネの人がこつちを見て何かに気づいたようだったけど、一体何だったんだろう？

——それはアレだ、そいつの行動を見たらわかると思うぞ

あの人の行動？ うーん……他の人の手助けをしていらっしやる？

——そこまでわかってて何でその先がわからないんだよ出久ちゃん……

その後は仮想ヴィラン退治はほどほどに、ピンチになってる人の手助けを中心にやって回った。緊張してカウントがとんじやったけど、たぶん合格ラインは突破してると思う。会場のあちこち走り回ったけど、僕よりヴィランを倒してそうな人を見ていな

いしたぶん合ってる。

—— たぶんを多用してて不安そうなんですけど大丈夫ですか？

僕の頭は学年でトップクラスなんだよ？ 大丈夫だよ、きつと。

—— 不安しかないですねえ……

そんな馬鹿な会話をしていると地面が揺れた。どこからともなく機械音が聞こえてくる。一体何が起こってるんだ？ 混乱していると辺りが暗くなった。今度は一体何が——

「んなつ」

—— いやお邪魔虫ってレベルじゃねえだろアレ

振り向いた先にはビルを軽々超える大きさをもった超巨大仮想ヴィランがいた。
ポイントお邪魔虫だ。

そいつは腕を振りかぶっている。拳は地面に向いていて、この後の行動を簡単に予想させる。

「やっぱい……！」

着弾地点の近くにいたので全速力でその場を離脱する。

そして、振り下ろされた拳は轟音と相応の衝撃波をまき散らす。

「おお、これはすつていい」

—— 見てみるよアレ、移動するだけでビルが崩れてるぞ。ありや近くにいただけで危険だぞ

全面的に肯定する。瓦礫が降っているし、そもそもアレは0ポイント、相手をしても時間の無駄になるだけだ。0ポイントと逆の方向に走っていく受験生に僕も習おうと足を向け——

瓦礫で身動きが取れない女性を見つけた。

足が彼女の下へ動く。頭で考えることなく、脊髓反射で動いてしまった。

—— おい！ 出久お前何して！

アレはいい人なの！

—— いい人ってお前俺にナイショでどうやって作ったの!?

校門！ 転びそうになった時に個性使って助けてくれた彼女！

—— ああ、いい人ってそういう……

ともかく！ 今は時間が惜しいから、よろしく！

——つたくよお……

「しょうがない奴だなお前は！」

「くそっ！　こんのお！」

運悪く瓦礫に足が挟まってしまった麗日お茶子はどうかして瓦礫をどけようとしていた。不幸中の幸いでケガはしていないものの、動けなくなってしまう。個性である無重力ゼログラビティを使おうにも、足を挟んでいる瓦礫の上にも瓦礫がありそこまで手が届かない。

彼女がいる方へ0ポイントヴィランが向かってくる。それが彼女は恐ろしかった。これは試験で万が一は絶対に起こらないことはわかっているが、巨大な鉄の塊が向かって来るのは恐怖心を煽り立てる。

頬を引き攣らせ始めた彼女に声がかけられた。

「そこにあんた！　伏せてくれ！」

声のする方を見る麗日、するとそこにはモジャモジャ髪の少年が走っていた。記憶にある人だ。誰よりも早く合図に反応し、ものすごいスピードとパワーで誰よりも多く仮

想ヴィランを倒していた人。

彼が腕を構えながら向かってきている。その顔があまりにも真剣だったので、素直に頭を抱える。すると、

斬！

音がした。何事かと見てみると瓦礫の大部分が切り落とされていた。あれほど強い増強系なのに複合型、なんて強個性なんだと呆然とする間に少年が麗日のもとに到達する。

「無事だな!? よしそれじゃここを脱出するぞ!」

そう言つて残る瓦礫をどかして麗日を抱きかかえる。

「え、ちよつ、ええ!」

「文句は後で聞くからな! 今はよ逃げる!」

「いやちよ、ま、つて速えええええええ!」

「さてさて、上手くいってよかった。後は適当に仮想ヴィラン倒して回ってフィニッシュだな。……………は? 倒したい? アレを? やはり賢いだけのバカだったか

……………」

「どうやら独り言が多い人であるようだ。」

「でもどうやって……………あの装甲か？ 舐めるんじゃないよ、余裕だよ余裕。んで、その後は？ ……………まあ、それならイけるだろうけどよ、どうやってそこまで行くつもりだ？ 5%じゃあそこまで行けねえぞ」

「あ、あのー！」

「んお？ どうしたんだ？」

「あの0ポイントヴィランを倒すつて聞こえたんですけど……………なんで、そんなことを？」

「あれを相手にしてもポイントは貰えないんですよ？」

「ああ、それはだね……………」

「アレが暴れて困る人がいて、俺はアレをどうにかできるかもしれない。だったらどうにかする。ヒーローは困っている人を助けるものだから、らしいぜ？」

その言葉に衝撃を受ける。

—— そうだ、そうだった。私はヒーローになりたいくてここにいるんだ

「っ！ だったら、私に手伝えることはありませんか!？」

目を瞬く少年。

「それは有難いけどよ、顔色ずいぶん悪いぞ？ 休んだ方がよくないか？」

「大丈夫ー夫！ なんの問題もないよ！」

再度、目を瞬かせる。すると少し笑って、

「それじゃお願いしようか。実はあいつの肩に飛び乗りたいんだが、いい方法が思い浮かばなくてな。何か良い案ない？」

「それなら私の個性がうってつけだよ。私の個性はゼログラビティって言って、手で触ったものを無重力にできるんよ！」

「おお！ そりゃいい！ 因みに解除はどうやって？」

「それも大丈夫、両手を合わせたら解除できるから」

すると彼は笑った。

「よっしゃ！ じゃあ今から俺を無重力にしてくれ」

「よし、それじゃあ行ってきます」

そう言って僕たちは跳び上がった。無重力だから、面白いぐらいにぐんぐん高く上がっていく。そして、彼は下にいるいい人、麗日さんに合図を送る。

「麗日さん！」

「うん！ 解除！」

重力の網に再度捕らわれる。それによって勢いがどんどん無くなっていき、ついには落下し始める。

目指すは0ポイントヴィランの肩だ。

「よし、しよおー！」

狙い通りに肩に着弾する。

その衝撃を、力の流れをコントロールし自身の力に変換する。

膨大なエネルギーを腕に宿しながら、彼は技を放つ。

旋風鉄斬拳

その拳は旋風を巻き起こし、鉄をも容易く両断する。

その名に恥じることなく彼は仮想ヴィランの首元の装甲を切り刻んで吹き飛ばす。

よく見ると装甲だけでなく、内部も刻んでいる。流星に凄、だけど僕も負けていない。

「よし、んじゃ——」

——カッコよく決めろよ出久

「もちろん！」

そう言つて、一步で首元まで間合いを詰める。

足元がひび割れ陥没するほど強く踏み込む。

先ほどと同じように衝撃を力に変える。

師匠にしこたま仕込まれた、10年をかけた研鑽を解き放つ。

流水岩碎拳

水が流れるような激みのない動きで岩を粉碎する拳。

僕の拳は内部構造のほとんどを吹き飛ばす。

——出久！

彼の言葉に弾かれるように逆向きに走り出す。0ポイントヴィランはその体を大きく左に傾けている。直に倒れるだろう。

それに巻き込まれたら流石に死ぬので、全力で走る。

肩から飛び上がり、近くにあつたビルの屋上に着地できた。

「ふう」

上手くいった。これ以上ないくらい上手くいった。アカン、ニヤけてまう。

——あー、ニヤニヤしてるところ悪いけどお知らせがあるぜ

ん？ どうしたの？

——これってヒーロー科の試験だろ？ てことはヒーローに反するような行為は減点対象になると思わないか？

確かにありそうだね。でも、僕たちそんな行為一切してないよね？

——後ろ、見てみな

言われて振り返る。そこには僕たちが倒したヴィランがビルをなぎ倒しながら倒れるところだった。

……うん？ ビルをなぎ倒しながら？

——ヒーローって器物損壊に気を付けながら活動してるよな？ じゃあ、これは結

構一大事なんじゃ

や

「やっちゃまったあああああ!?!」

筆記は完璧でした。でもヒーロー科は実技重視なんでオワタ。

ゼログラビティに副作用でもあったのか体が重い。足跡が陥没してる気がしないで

もない。まったくもー麗日さんはおちやめだなーあははははあああ。

——こいつは重傷だな……

「おいデク！」

唐突に声をかけられる。振り返ると見知った顔があつた。

「かつちゃん」

爆豪勝己。僕の幼馴染。

金色の髪を伸ばして後ろにひとまとめにしている。顔は整っていて、赤い瞳は勝気につり上がっている。その瞳の中には強い意志を覗かせる。中学生にしては発育は良いほうだろう。いや、中学生の発育事情なんて知らんけど。

簡潔にまとめると、レベルの高い幼馴染美少女がいた。これで口が悪くなかったらさぞやモテただろうに。……そういや、そこがいつて息巻いてた連中がいたな。わかりたくない世界だ。

かつちゃんはこちらにガンをつけている。いつものことだがキツイ、精神的にキツイ。特に今は。

「どうしたのかつちゃん、何か用？」

「っ……！！ テメエ……まあいい。で、どうだったんだ」

「えつと……何が？」

「っ、だから、試験だよ試験！ 受かってる自信はあるのかって聞いてんだクソナード

！」

「え、心配してくれてるの？ ありがとうかつちゃん」

「なんっ、ちげえよぶっ殺すぞ!？」

「あはは、うん。筆記は完璧だったんだけど、実技でやらかしちゃって……正直微妙なラインなんだ」

「……ちっ、そうかよ」

そこで会話が途切れる。何か言いたげな雰囲気なので言葉を待つ。

「オレは雄英に行く。そこで一番になって、ゆくゆくはN.O. 1ヒーローになる。」

ゆっくりと、言い聞かせるように言葉を重ねる

「だから、お前も来い。オレと同じところに来い。」

瞳の奥にあつた強い意志が表に出てくる。それは彼女の感情につられるように爛々と輝く。彼女の纏う空気と絶妙にマッチしているそれは彼女の魅力を何倍にもさせる。

そして、こちらに指を突き付けて言い放った。

「お前を倒すのは、このオレだ！」

そう言つて彼女は背を向けて去つて行つた。

かつちゃん、君は……

——あいつ帰り道逆じゃね？　かつちゃんマジおちやめ

本人の前では絶対に言わないでね、まだ死にたくないんだ。

入試からしばらく経つた。今日中にでも結果が届くと思うんだけど……

——お前もママンも心配し過ぎだつて。ウロチヨロすんなつて歩き回るな、壁ドンは経験したことあるけど、下の階からの床ドンとか初めてで怖かつたんだぞ

ご、ごめん。

そろそろ12時を回ろうかという時間。あれから鍛錬したり、師匠と鍛サンドバッグ錬したり、師匠のお兄さんと鍛タコ殴りの刑錬したりしていた。

あいつら鬼か。

そして、あの人とは連絡すら繋がらない。……考えたくないけど見捨てられた、とか。

——それはねえよ。たとえ落ちてたとしても、あの人は連絡もせず捨てはしねえつて。それに、あれも持つてるしな

だといんだけどね。

するとドタドタと騒がしい音が聞こえてきた。

「いつ出久！ 来た！ 来たわよ!？」

母さんの手には雄英の封筒が握られていた。

僕の部屋に入り封筒をあけた。中にはよくわからない機械が1つ。やつべここで最後の篩にかけるとか流石雄英やでえ……。使い方わからないオワタ。

——落ち着け阿呆、横つちよに何かボタンがあるはずだからそれ押しとけ
そうなの？ じゃポチつと。

『私が投影された!!』

!?

——!?

オールマイイト!? オールマイイトナンデ!?

『実は来年度から雄英の教師になるんだよ！ 小粋なサプライズつてやつさ!』

サプライズ過ぎて言語機能が一瞬乱れた。

『さて、ではさつそく結果発表といこうか。緑谷出久君、君のヴィランポイント53！

素晴らしい記録だぜ』

そう言つてサムズアップするオールマイト。思わず笑みがこぼれる。と、ということ
は……………！

『だが残念かな、最後の0ポイントヴィランで街に大きな被害を出してしまったね。我々ヒーローの本質はヴィラン退治というより人助けなのは知っているね？ そういつた意味では君が出してしまった被害は少々大きすぎた。 緑谷出久君、マイナスポイント30。』

—————……………。

『よつて君のポイントは23、これだけでは不合格だ』

……………わかつてはいた。わかつてはいたが、これは……………。

『そう、このままでは！』

オールマイトの言葉に顔を上げる

『それがこれ！ レスキューポイント！ ヒーローの本質は人助け、それを頑張つた人を評価しないなんて、あるかつて話だ。』

『緑谷出久君、レスキューポイント50！ つまり、君の合計ポイントは73！ 文句なしの合格だ!!』

オ、オールマイトオ……………！！

『緑谷少年、君と初めて会つた時、君は私に言ったね。無個性でもヒーローになれるか

と。私はそれに無理だ、諦めろと言った。今でもその言葉は間違っちゃいないと思ってる。ヒーローの現場は危険と隣り合わせだからね。……そんな私に、君はこう言った。それでもヒーローを目指すと、私の様などんな時でも笑っていられる強いヒーローを目指す。ヒーローの本質は人助け、そしてその下支えはどんな逆境でも挫けない不屈の精神！ 私は君の心意気を買ってるんだぜ！ そして君は困難を払う力を手に入れた。だから——』

『来いよ、緑谷出久！ ここが、君のヒーローアカデミアだ!!』

~~~~~!!

「やった！ やったよ母さん！ 僕、うかつ受かったよ!! 雄英に合格したんだ!」

「ほ、本当!! よがった、よがったねいずぐぐ!!」

「あははは！ 泣きすぎだよ!」

「う、うん。そうだ！ 今日はお祝いしなきゃね！ 特上カツ丼作ってあげる！ そうと決まればお肉買ってこなくちゃ!」

「よーし！ 僕が連れ行くよ！ そっちのほうが早いし！ フルカウル!!」

——いやちよ、それはマズい！ それはアカンで出久!

「今なら何だって出来る気がする！」

——個性はらめええええ！

## 爆豪勝己：オリジン

私の幼馴染はヒーローに憧れている。いや、正確にはNo.1ヒーローであるオールマイトに憧れている。それは筋金入りでオールマイトのデビュー時の映像、災害救助をしている動画の再生回数を幼馴染だけで万単位で増やしている疑惑がある。

そんな彼は個性が発現するのが遅かった。私を含めた周りは、そんな彼を無個性とからかっていた。もちろん悪意のないただのノリで、彼もそのノリに乗ってバカ騒ぎしていた。

彼が本当に無個性と判明するまでは。

無個性だとわかった彼は周りが心配するほど落ち込んでいた。私は励まそうとしたが、聞こえていない様子で呆然としていた。遊ぶ時も、お喋りする時も、ご飯を食べる時も、彼は心ここに在らずといった様子で、私の心配はどんどん大きくなっていった。と思っただけの間にか立ち直っていたのだ。

なぜか顔に活力が漲っていて、なぜか沢山勉強を始めて、なぜかいっぱい運動していた。みんなは夢破れたのがショックでそれを忘れようとしているんじゃないか、なんて噂していた。彼が言った、ショックで二重人格になった宣言がそれに拍車をかけてい

た。

でも、私はそれが間違いであることを確信していた。

運動はヒーローになるための訓練で、勉強は無個性であることを補おうとしているからで、顔の活力はヒーローになる夢がただの夢でなくなつたから。

そう考えるとつじつまが合うのだ。急に勉強や運動を始めたことも、急に人助けを率先してやるようになったのも。

おそらくもう一人の彼、裏谷うらたにとか名乗っている奴が原因だ。急に精悍な顔になつたり、急に大人びた言動したり。ホントもう勘弁してほしい。

なんだか、一人置いて行かれた気分なんだ。

ずっと一緒だつたじゃないか。遊ぶ時も、お喋りする時も、ご飯を食べる時も、何ならクラスだつてずっと一緒だつたじゃないか。それが一人で先走りよつてからに。

それからだ、一人称を私からオレに変えたのは。

少しでも彼に追いつきたかつたから。

彼が拳法を習っているらしいと聞いて、オレも格闘技を習つた。中学生になつてから始めたからアイツには敵わないかもしれない。でもオレには個性がある。それを踏ま

えれば互角に戦える、はずだ。

「中学3年生になり進路を真剣に考える時期になった。アイツのことだ、どうせプロヒーローの登竜門と呼ばれる雄英を志望しているだろう。」

だからオレも雄英を志望した。

勘違いの無いよう言っておくが、オレの目標はアイツを、緑谷出久を超えることだ。目標が近くに居ないと超えたかどうかかわからない。だから一緒のところに行くだけだ、他意はない。

それに、今までずっと一緒だったものが急になくなくても困る。考えただけでもモヤモヤする。最高のパフォーマンスを維持する為にも一緒にいる方が良いだろう。

案の定アイツは雄英を志望していた。予想が外れない、単純で素直、ホントしようがない奴。少し厳しいかもしれない。けど、きつと合格するだろう。ずっと見てきたオレが言うんだから間違いない。

ただ、クラスの奴らはそんな彼を笑っていた。「爆豪はともかく、頭が良いだけじゃ無理だ」、「そもそも無個性では書類審査で落とされるんじゃないやねーの?」口々に奴らは言った。

アイツのことを、アイツの努力を何も知らないくせに、貶してんじゃないやねえカス共が。今思い出すだけで腹が立つ。思わず足元にあったペットボトルを蹴つてしまうくら

いには。重さからして中身があつたのだろう、こぼれてたら掃除しなくては。確認のために近づいていく。それが、全ての始まりとも知らずに。

「良い個性の、隠れミノ」

苦しい、息ができない。

身動きも取れない。

体にヘド口が纏わりついている。

くさい、さわるな、くちのなかにはいるな。

いきが、できない。

ペットボトルにはヴィランが入っていた。ナンデそんなところに入ってたんだよ変態か。襲われて抵抗を試みたが、奮戦虚しく捕らわれてしまった。今でもどうかして脱出しようとしている。無駄に被害を拡大させている気がしないでもないが知ったこつちやない。このオレがヴィランに捕まってるってだけで腹立たしいのに、これはオレの体をまさぐつてやがる。これが一番腹立たしい。死にたくなってくる。

もがく。しかし手をバタつかせるだけだ。

もがく。ヘド口を蹴ったが効果は薄い。

もがく。一瞬口を解放できたがまた拘束される。  
もがく。もううごくことすらつらくなってきた。  
だれか………たす、け………。

「かつちゃん!!」

彼の、声が聞こえた。

飛びかけていた意識が戻る。

目を開いて声の方を見る。

私の幼馴染、緑谷出久がこちらに走ってきていた。

「なんで、ここに。いや、ちが、来るな。無個性では巻き添えになるだけで——」  
「どっつせい!!」

持っていた靴を投げつける。靴は狙いすましたようにヴィランに目玉に直撃した。  
怯んだのか拘束が緩まる。口が自由になった。

「っ! てめえデク! 何してやがる! さっさと逃げろ!!」

「嫌だ!!」

「ああ!?! 何言って——」



「君が！ 助けを求めていたから！ 絶対に助け出してみせる!!」

被せるように言われた言葉。それに次の言葉が出せなくなる。ああそうだ、お前はいつもそうだ。困ってる奴を見過ごせない、困ってるのに言い出せない奴を見逃さない。

お前は、いつも……!

そうこうしていると彼がすぐそこまで来る。手を伸ばせば届く距離、そしてそれは彼の間合いだ。

「流水岩碎拳」

纏わりついてきたヘッドロが吹き飛んだ。

体が投げ出される。倒れる、手を突こうと伸ばす。

すると彼はその手を掴み取った。

そして彼に投げ飛ばされる。

「!? てめ、なにして!?!」

彼が走ってきた方向に投げ飛ばされた。おかげでもうヘッドロに捕まることはない。

しかしそれは、捕まるのが私から彼に変わるだけだ。

「この、クソがあああああああ!!」

回復したヴィランが叫びながら彼を捕らえる。

「少しでも近づいてみる！ このガキを潰すぞ！」

半狂乱になったヴィランが周囲にいるヒーローに喚いている。私が抵抗する時に個性を使っていたから近づけなかったヒーローが来ることを恐れたのだ。

それを見た私は言葉をもらす。

「……てめえは、いつもそうだ。いつも困ってるやつを見つけては助けて。いつも、誰にでも手を差し伸べて」

そうだ、こいつはいつもいつも……。

「でも！ てめえが！ 傷ついてちや意味ねえだろうが！ ふざけんなよクソデク！」

なんで自分を傷つける。なんで自分を大切にしない。止めてくれ、貴方が傷つくのを見たくない。

思いが口をついて出ていく。止まらない激情が言葉になって止められない。

「なんで、なんでっ！」

なんで、お前は、心底よかったって顔で笑ってやがる！

「もう大丈夫だ」

後ろから声がする。振り返ると見上げるような大男。

「私が出来た」

オールマイトの一撃ですべて終わった。オールマイトはインタビューを受けている。その傍らでデクは叱られている。あんな危険なことをしたんだ、当然だ。

そしてオレは、なぜか褒められている。やれよく頑張った、やれサイドキックに。そんな言葉はすべて耳を通り過ぎていく。思い返されるのは無様な自分。ヴィランに捕らわれ何もできなかった自分。

何より、また彼に助けられてしまった自分。

「っ！…クソがあ……！」

「おいデク！」

「かつちゃん」

帰路についていた彼を呼び止める。今日は雄英の入試だった。今日の手ごたえを聞いたため呼び止める。筆記は心配ない、だが実技が心配だ。

10か月前に個性が生えたときほざいているこのバカが、たった10か月で個性を手足のように扱えるとは思えない。他の奴らが16年の歳月を費やしてきたものに太刀打ちできるか不安だった。

「どうしたのかつちゃん、何か用？」

「っ……………！ テメエ……………まあいい。で、どうだったんだ」

「えつと……………何が？」

「っ、だから、試験だよ試験！ 受かってる自信はあるのかって聞いてんだクソナード！」

「こいつう……………！ 人の気も知らないで……………」

「え、心配してくれてるの？ ありがとうかつちゃん」

「なんっ、ちげえよぶつ殺すぞ!!」

「ナニ言ってるんだこいつ!? いや違う！ ナニ言ってるんだ私！ その通りだろ!!」

「あはは、うん。筆記は完璧だったんだけど、実技でやらかしちゃって……………正直微妙なラインなんだ」

「……………ちっ、そうかよ」

「会話が途切れてしまう。イカン気まずい、何か言わねば。」

「オレは雄英に行く。そこで一番になって、ゆくゆくはN.O. 1ヒーローになる。」

ひねり出した言葉がこれだ。そうじゃない、そうじゃないだろ私。あんなに頑張ったんだから大丈夫だって一言すら言えんのか私の口は。

でも、と思い直す。

これはいい機会じゃなからうか。私の思いを宣言する、いい機会なんじゃ？

意を決して言葉を重ねる。

「だから、お前も来い。オレと同じところに来い。」

こう言えば例え落ちたとしてもこいつなら来年も英雄を受験するに違いない。何故かこいつは私を追いかけている節がある。いつも見ている私が言うんだから間違いない。

言つてから感情が高ぶっていく。そうだ、この気持ちだけは伝えねば。

「お前を倒すのは、このオレだー！」

貴方にはもう傷ついて欲しくないから。

貴方が人を助ける代わりに傷つくのが辛いんです。

だから私は強くなります。

貴方が傷つかなくて済むように。

誰かを助ける、貴方を助ける為に。

私は貴方の隣に立ちたいんです。

## 屋内対人戦闘訓練

雄英高校に合格した僕たちは意気揚々と入学式に向かった。そしたらいきなり体力テストが敢行された。いや入学式すつぽかすとか、自由が校風だとしても自由過ぎやしませんかね。しかもテスト最下位は退学とか言われるし。まあそれはただの脅しで、僕たちに発破をかけただけらしいけど。それにしてもパンチが効きすぎている感が否めない。

入学初日から不安しかなかった僕たちだけど、なんやかんやで上手くやれている、と思う。今のところ授業には着いていけているし、クラスメートとの仲もいい感じだ。不安に感じているのは実技だけだ。

まあ今が実技の真つ最中なんですけどね。

屋内対人戦闘訓練、それが今から行われる授業の内容だ。2対2に別れるチーム戦で、僕たちのペアは障子君だ。相手は尾白君と葉隠さんのペアで、僕たちのチームはどう攻略するか話し合っている。

「複製腕？」

「そうだ。この触腕の先に目とか耳を作って各機能を向上できるのがオレの個性だ」

「それじゃあ相手の場所を探知したり、葉隠さんを見つけたりできる？」

「居場所は問題ないが、なんで葉隠なんだ？」

「あ、いや、葉隠さんはあの通り透明になる個性だからそれを最大限活用しようと思えば服を全部脱いで完全に透明になることなんだけどいや別に僕がそれを望んでるってわけじゃなくてただ考えられる最も効率的な行動がそうなだけであって僕が彼女をそういう目で見ているとかそんなんじゃないよ——」

「分かった、分かったから！ 落ち着け緑谷！ つまりオレが葉隠を抑えればいいんだな!？」

「え、う、うん。そうだね、僕の個性は単純な増強型だから、姿を見せない相手に一方的にやられるかもしれないから」

「分かった、任せておけ。そうなると尾白の相手は緑谷になるが、大丈夫か？」

「……うん、大丈夫。尾白君の個性はたぶんあの尻尾だと思う。あの尻尾が二又になったり増殖したりしない限り、たぶん大丈夫」

「……ただ尻尾があるだけの個性で入学できたんだ。おそらく格闘術に長けている。それでもか？」

「もちろん！」

そう言うって僕は流水岩碎拳の構えを見せる。

「僕だつて拳法をやつてるから、そう簡単には負けないよ！」

「ハハハ、それなら安心だな」

「なんで今笑つたの!？」

「いやすまん、余りにも自信満々に言うから身長も相まつて子供に見えた」

「暗にチビつて言われた!？」 障子君が大きいだけだからね!？」

そして屋内対人戦闘訓練が始まつた。

「早いな、もうここまで来るなんて」

「障子君が居場所の目星を付けてくれたからね。ここまで一直線だつたよ」

「そつか障子が……、怪力が出せるだけと思つたんだけどな」

そう言うって困つたように頬を掻く尾白君。まあ体力テストの握力では凄い数値叩き出してたから、勘違いしてもしようがない。

あー分かる分かると言いながらさり気なく間合いを詰めていく。

「そこまでだ」

足を止める。目の前には空手に似た構えをとる尾白君の姿があつた。先ほどまでの柔和な雰囲気は消え去り、武道を習っている人特有の威圧感を出している。



—— おお、スゲー威圧感。隙もないし、かなりの強敵だな  
うん、だね。でも僕たちだつて負けてない。

僕たちの拳は師匠たちの拳でもあるからね、そう簡単に負けられない。

—— あー、うん。確かに。格闘技を使う同年代に負けたと知ったら、あのジジイ共  
なにするかねえ。考えたくねー

………俄然やる気が湧いてきた！

「っ！ へえ、緑谷も結構デキるみたいだな」

「もちろん、同級生には負ける気がしないね」

「………言つてくれるね」

「では」

「尋常に」

『勝負!!』

同時に踏み出した僕たちは、拳を激突させた。

## 爆豪 V S 轟

「さて、反省会といこうか！」

というわけで、終わりました屋内対人戦闘訓練。これからオールマイトと観戦していたクラスの皆で僕たちの訓練内容の反省をするらしい。1発目の組だったから知らなかった。というか、アレを反省するの？ 皆で？ めっちゃ恥ずかしいんですけど。

「まずは内容を振り返ってみようか」

尾白君と激突したあと、僕と尾白君は大接戦を繰り広げた。尾白君は尻尾を最大限活用できるような格闘技で、繰り出される技から空手や柔道といったものを組み合わせた我流に近いモノだと分かった。

尻尾を体の陰にかくして尻尾攻撃の出だしを悟らせないようにする繊細な技術、逆に派手に尻尾を使って室内を三次元的に動き回るトリッキーな立ち回り、胴回りより太い尻尾の強烈な一撃、どれをとっても初めて見たモノでとても興奮した。あれらの対処に追われて中々攻勢に出られなかったのが今でも悔しい。なんなら今からもう一試合やりたいぐらいだ。

しかし今は訓練だ。ハッスルしすぎてしまった。

「緑谷少年、尾白少年、正直驚いたぜ。君たちの格闘技は高校1年生のレベルを超えている。それはヴィランと戦う上で大きな力になる！」

尾白君と目を合わせて、同時にはにかなりでしよう。あのオールマイトにこれまでの努力を誉められたんだ。やっべ二ヤけちゃう。

「しかし、君たちこれがチーム戦の訓練だつてこと、忘れてないかい？」

尾白君と同時に目をそらす。

「君たちが戦っている最中に障子少年と葉隠少女が合流したね。でも君たちはそれに気が付かず更に激しく交戦、二人をひき逃げした挙句に核の模型までぶっ壊しちゃうから先生ビックリしたぜ」

そう、そうなんです。熾烈な戦いにお互いヒートアップしちゃったんです。逃げてきた葉隠さんとそれを追いかけてきた障子君に気付かなかったんだ。丁度その時、三次元的な攻撃を捌いて攻撃してと一番激しい時だった。それに巻き込まれて2人は脱落、勢い余つて核の模型を破壊してしまうという、何とも締まりのないものになってしまったんだ。

でも楽しかったんだからしようがない。今まで組手は師匠とそのお兄さんとかやったことがなかった。初めての同世代との闘いは楽しかった。加えて、僕たちが鍛錬を積んでいくら強くなっても、師匠方はそれを軽く上回る仙人みたいな方たちなので強

なくなったという実感が薄かったのだ。それが今回、あの雄英の生徒と互角に戦って自分の強さを実感できたのは嬉しかったんだ。

——まあただの言い訳だな  
うるさい。

「君たち、今日は訓練だから良かったけど、これももし実戦だったら大変だった……：……というか大惨事だったね。敵味方をひき殺したり、核爆弾をぶつ壊しちやったり。もつと周囲を見ることが君たちの課題だぜ！」

正論過ぎてぐうの音も出ない。

——てか戦闘でも周りに気を配れないって中々の致命傷だぞ？　もし戦ってる中に別のヴィランが割り込んできたら対処できないってことだぞ？　大丈夫？　一から師匠に扱いてもらう？

はい、ごもつともです。でも師匠に告げ口は止めてね、僕たち死んじゃうから。……でも本当に気を付けなきゃね、ヒーローの優先事項は人命だから。ヴィランを倒すことに躍起になって人命を軽んじる、なんてことになったら本末転倒もいいとこだ。

——分かってるならいいさ

僕たちの反省会が終わって、次の訓練が始まるうとしている。個人的には今回で一番

の注目カードだ。

麗日さん轟君のヒーローチーム対かっちゃん飯田君のヴィランチーム。注目すべきなのは轟君とかっちゃんの2人。轟君は一年で4人しかいない推薦入学者で、体力テストでも好成绩を残している実力者だ。かっちゃんは幼馴染の鼻肩目を抜いても物凄い才能の塊だ。個性である爆破は高威力かつ応用力のある強個性だし、かっちゃん自身の身体能力も抜群。なにより、かっちゃんはとても努力家だ。かっちゃん程の才能のある人が人並外れた努力をしているんだ、轟君といい勝負になるのは間違いない。

——早口妄想に勤しんでるとこ悪いけど始まるぞ

裏谷君に言われてモニターを見る。そこにはそれぞれの姿が映し出されていた。

「では、訓練開始！」

オールマイトが合図をだした。すると轟君が建物の側壁に手を付け——

建物の大部分が氷漬けになる。

「——え？」

——オイオイ、こいつはとんでもねえな

周りの皆も呆然としている。あんな一瞬で氷漬けにするなんて……。すごい、すごすぎる！ たぶん中にいる二人は足が氷で覆われているはずだ。そうなれば打つ手が無い、あの一瞬で勝負を決めるなんて！

——いや、そうはならないみたいだな

え？

モニターはヴィランチームを映す。そこには氷を回避した2人の姿があった。

「す、すまない爆豪さん。助かった」

「ちつ、次は気をつけろクソメガネ」

建物が凍る一瞬、爆豪は異変を察知し爆破で飛び上がったのだ。そのついでとばかりに飯田も爆破し助けている。やり方は酷いものだが、助けられた飯田は不満を飲み込み感謝を述べた。

爆豪は室内を見渡すが、見事に氷で覆われている。この分ではビル全体がこの有様だろう。核の模型も凍らされていた。ヒーローチームの勝利条件は核の確保なので負けてはいないが、ヴィランチームは劣勢に立たされている。

「……クソガ。おい、核は動かせそうか」

「いやダメだ、完全に凍っている」

動かせるのであれば、氷の薄い少しでも戦いやすい場所に運ぼうと思ったのだが、それは不可能なようだ。となれば、ここで核を守るために一人残ることになる。どちらが残ればいいのか。

「……おいクソメガネ、テメエの個性は速く走れる個性だったな。この状況でその足は生かせそうか」

ビルが凍っているのも、もちろん床も凍っている。これでは満足に動くことができない。スパイクでもついていければ話は違っただろうが、そんなものはコスチュームにない。

「……すまない、この足場では走り回ることはできない。……っ！ 機動力が持ち味なのに、本当にすまない！」

「謝んなうぜえ。だったらここで核を守ってろ。この部屋の広さなら機動力がなくても戦えるハズだ」

「分かった、しかし爆豪さんはどうする？ 君も十分に動けないだろう？」

「飛び続ければ関係ねえよ。オレは半分野郎とやる、丸顔は任せるぞ」

「ま、丸顔とは麗日さんのことだな？ 任せてもらおう！」

即席で作戦を決めた爆豪は歩き出す。その爆豪に飯田は声をかけた。

「爆豪さん、気を付けて！ 轟君は強いぞ！」

「アホが、オレのが強いわ！ テメエはテメエの心配してるクソメガネ！」

「と、轟君すぎすぎひん!? ビルを一瞬でこう、びきーんって！」

「ぴきーん？ まあいいか。それよりスパイク付けるから足裏見せろ」

そう言つて氷でスパイクを作る轟。これでヒーローチームは足場の悪条件を克服した。

「これから核のある場所を探す。麗日はどこにあると思う？」

「えっと、たぶん上の階にあると思う。危険を少なくしようとしたら、やっぱり下より上の階やもん」

「そうか、俺もそう思う。だったら3階より上の階から探そう。そこまでは全部無視するぞ」

「うん！ 分かった！」

核のある部屋を探すが見つからない。しらみつぶしに探しているので時間が思ったよりもかかっている。

「ねえ轟君、もしかしたらヴィランチームは動けなくなってるってことはないかな」

「あり得る、というか可能性は高いだろうな」

「じゃあ手分けして探さん？ そっちの方が早よ見つけれられるし！」

「……そうだな、そうするか。ただし、見つけたら呼んでくれ。万が一があるかもしれない、確保の時は2人のほうがいい。麗日は2つ上の階を、俺は上の階を調べる」

「わかった！ じゃあ後でね！」



「ああ」

麗日と別れ、一人で核を探す轟。ヴィランチームも氷結に巻き込み行動不能にするための先制攻撃だったが、どこに居るかわからなかった為にやりすぎてしまったかもしれない。体が氷漬けになったヴィランチームを想像する轟。もしそうだったら早く解決しなければマズい。

「……少し急ぐか」

「見つけたぞ半分野郎！」

爆発音と共に声がした。

「っー」

後ろからの音に咄嗟に振り返れば視界には迫る拳。ガードもままならず、顔面に貰ってしまい吹き飛ぶ。

「くっー」

殴られる瞬間、自ら後ろに跳び衝撃を軽減するも少くないダメージを負う。口の中を切ったようで、血の味と口が濡れる感覚がした。

跳び上がり態勢を整える。そこで改めて敵の姿を確認した。体のラインが浮き出るピツタリとしたウェア、整った顔には不釣り合いな、物々しい両手足のガントレットとグリーブ。ヴィランチームの一人、爆豪勝己だ。その姿に交戦した様子はない。麗日と

は入れ違いになったのだろう、応援を呼ぼうとするもさっきの一撃でインカムが故障したことに気づく。心の中で舌打ちをしながら状況を判断する。

先制攻撃が決まったと思ひ込み油断、一撃貫つてしまう。目の前の敵が無事ならもう片方も無事であると考えられ、戦闘には不向きと考えられる麗日は1対1を強いられる。自身も最初の一撃で個性の許容上限が近い。

紛れもなく劣勢だ。そう判断する轟。だがこの足場ではこちらが有利、それを使つて上手く立ち回るしかない。

「よく無事だったな」

「ああ？ あんなトロロい攻撃喰らうかよ舐めんな」

「……そうか、トロかったか」

「じゃあもつと速い一撃モノやるよ」

個性を使い、足先から氷を生やす。それは物凄いスピードで爆豪に向かう。

「だからよお……」

これは避けられるだろうが、この距離なら左右どちらに避けても次の一手は確実に当たる。そう思い相手の動きに目を凝らす。

しかし、

「舐めてんじゃ、ねえ!!」

「またもや爆発音。左右のどちらでもない、上に避けられた。」

「何！」

「爆速ターボ！」

さらに加速し接近する爆豪は勢いそのままに殴り掛かった。

「チィー！」

それを氷の壁を築くことで防ぐ。壁は爆豪の一撃を見事防いだ。ガードされた爆豪はもう一方の腕で壁を爆破する。

BOOM！

壁はあっさりと崩れ去る。距離を置く間もなく破壊され、目を見張る轟。爆豪はそんな轟に殴った方の手を突き出す。

「くたばれえ!!」

再三の爆発音が響いた。

吹き飛ばす体、遠のく意識。

「ガッ！」

頭を打ち付けた痛みで意識が戻る。吹き飛ばされたのなら好都合、そのまま距離を開け態勢を整える。

「逃がすか！」

爆豪は爆速ターボで距離を詰める。その姿を見て悪態をつく轟。

「ちっ、それじゃ足場は関係ねえ、か！」

繰り出される右拳に左手を使い後ろに逸らす。結果半身になったので右ストレートを打ちだす。

その前に左半身を襲う衝撃で、壁に叩きつけられる。

見れば逸らした右手、そのガントレットは掌に穴がありそこから煙が立ち上っている。逸らされた瞬間、拳を開いて爆破したのだ。次いで迫る蹴りを前転で回避、氷を生み出し爆豪へ打ち出す。爆豪は大きく飛びのき回避する。

「はっ！ 推薦つっても大したことねえな！」

「言ってる」

爆発を推進力に迫る爆豪。それを何とか避ける轟だが、爆豪は止まらない。宙に浮いたまま方向転換する。

壁を、床を、天井を、崩れた氷塊を。場にあるものすべてを使い三次元的に飛び回る。その速さはもはや目で追えるモノでなくなっている。

「クソッ！ どんな平衡感覚して——」

「貰ったあ！」

顔に迫る拳を両腕を使ってガードする。

「爆速マシンガン！」

その上から信じられない速さのラッシュユが叩き込まれる。チラリと見れば肘から爆破してスピードを出しているようだった。

「防戦一方か！ ええ!？」

「調子に——」

「っ!？」

雰囲気が変わった轟に距離を開ける爆豪。

轟は右足を踏みしめる。彼の足元が一面凍結する。ささくれ立ったその表面は、彼の心情を表しているようだ。

「——乗るな!!」

今でき得る最大の氷塊を生み出す轟。

「ハッ！ 面白れえ——」

両の掌を向ける爆豪。その腕を肩まで覆うガントレットが変形し、砲身のようなものが幾つも出現する。その砲身が熱を帯びる。

「死ねえ!!」

全砲門が一斉に特大の火を噴いた。

ビルを半壊させた両者の一撃は完全に相殺し合い、爆豪も轟も新たな傷はない。さあ仕切り直した、と爆豪は一步踏み出し――

『ヒーローチームWIN!』

「……………は?」

「さて、反省会といこうか!」

オールマイトが宣言した。しかしクラスメイトは興奮冷めやらぬ様子で話し合っている。もちろん僕もその一人だ。

話題はかっちゃん和轟君の戦い。爆発使用のかっちゃんと氷使用の轟君の戦いは、その規模・派手さから見ている者を大いに興奮させるものだった。加えて、両者の確かな腕前が窺えたのも拍車を掛けている。

――いやあ、高校生同士のバトルとは思えない程のレベルだったなあ

すごい、本当に凄いの一言だ。特にかっちゃん。彼女の才能の高さは知っていたが、これほどの実力を持っていたとは。雄英の推薦入学者は軒並み実力者だ。その実力者

を終始圧倒したかつちゃんは凄い、ホント凄い。鍛錬の跡が見える動きがあったのが個人的にぐっと来た、マジ凄い。

—— 凄い多用してるけど大丈夫？ 興奮で言語中枢おかしくなつた？ 一発叩いて直してあげよっか？

昔の家電製品じゃないんで叩いてもさらに壊れるだけだから。

「轟少年と爆豪少女、2人は本当に凄いよ。正直、その戦闘能力なら、その辺のプロヒーローを凌駕しているだろうね」

オールマイトの言葉に、僕を含めたクラスメイト全員が頷く。かつちゃんは言わずもかな、それと見事な戦いを見せた轟君もただモノじゃない。

「ただ、それは戦闘能力だけの話。ヒーローはそれだけじゃ務まらない。最後の一撃、あの衝突でビルは半壊、建築物に大きな被害を出してしまつたね。……………アレ、もしもプロヒーローがやってしまつたら損害賠償スゴイよ、たぶん。周囲の被害を最小限にとどめて騒ぎを収束させるのも、ヒーローに必要な能力の1つだよ。それに、あの衝突で姿勢を崩してしまつた飯田少年の間をついて麗日少女は核を確保したしね、個人の勝敗を決する前にチームの勝敗を決めてしまつたワケだ。以後、気を付けるように！」

「……………ちっ」

「はっ」

それから麗日さんと飯田君の話に移っていく。その話を聞きながら考え込んでいた。

——どうした出久、なにか気になるか

……うん。正直に言ってちよつとシヨックだったんだ。

——そうか、シヨックなのか。それは何に對してだ？

かつちゃんとは幼馴染で、幼稚園も小中学校も、なんならクラスまでずっと一緒だったから。かつちゃんの口は悪いけど仲は悪くないし、かつちゃんのこと理解してるつもりだったんだ。……でも、かつちゃんがこんなにも凄いだなんて知らなかった。あんな超速三次元移動できるほど特訓しているなんて知らなかった。それが、幼馴染としてシヨックで……。

——なるほどな、それでシヨックなのか。でもよ、それは向こうも同じだと思っただけ？

——俺たちもアイツに何も話してない。師匠のことも、オールマイトから受け継いだ個性のことも。……もちろん個性のことは話せねえ、口止めもされてるしな。でもいつかはちゃんと話さなきゃな。隠し事されてシヨックなのは向こうも同じだよ。だからよ、今は話せないけどいつか絶対に話すって言わないとな。

……うん、そうだね、それがいい。それで仲が拗れちゃうのも嫌だしね！

——そうそう、じゃないと俺の娯楽の1つが昼ドラ展開になってしまう。俺昼ドラ



苦手なんだよ

昼ドラ？　なんで今？

——自分で気づけ主人公

裏谷君と話していたら反省会が終わっていた。次の組が移動していて、少し時間が出てきている。かつちゃんと轟君は皆に囲まれていた。

かつちゃんが皆を追い払ってため息をついている。僕は近づき声をかける。

「かつちゃん」

「——んだよデク、なんか用かよ」

少し固まってからこちらを半目で見てくる。その顔は赤く、先ほどの戦闘が激しいモノだったことを物語っている。

——だめだこりゃ

「すごかったよかつちゃん、本当に」

「……そうかよ」

「それでね、思ったことがあるんだ」

「あ？　んだよ」

「……隠し事されるってツライね。」

「……………」

「だからさ、ゴメン。僕も君に個性について隠していることがある。……でも、それはまだ言えない」

「っ！ テメエ」

「だから！」

少し大きい声を出して言葉を遮る。

「だから、待っていて欲しいんだ。ちゃんと伝えるようになる、その時まで」

「……、は？ え？ ちょ、えっ？」

「？ どうしたのかつちゃん？ 僕なにか変な事言った？」

「て、てめえ……！！ このクソナードが！ ぶっ殺すぞ、ああん!？」

「なんで!？」

「おい爆豪」

話していると轟君がかつちゃんに声をかけてきた。

「なんだ今こいつ殺すのに忙しいんだが!？」

「すぐに終わる」

その顔はあまりにも真剣で、かつちゃんもじやれつくのを止める。

「……今回はいいようにやられた。でも、次もこうはいかせねえ」

轟君の右しか見えない、クールな印象を与える目に熱がこもる。

「次やるときは、倒す」

「はっ、やってみろよザコが」

## USJにて迷子のお知らせ

「やられたー！」

黒い霧が晴れ、さつきとは違う場所にいることを確認して思わず叫んでしまう。

何故、どうやって、他の皆は無事なのか。様々な疑問が湧いて出てきては違う疑問がそれを塗り替えていく。頭が混乱している、思考がまとまらない。

早く、早く何とかしないと！

——落ち着け出久!!

「うぐっ!?!」

頭の中で叫ばれて頭を押さえる。

——焦っても余計に状況が悪くなるだけ、冷静になるんだ。周囲にヴィランの姿は見えねえし少しくらい時間はある、状況判断は得意だろ？

彼の声がする。言い聞かせるような、聞く人を落ち着かせる声だ。

「すう、はあ……。ゴメンありがとう、ちよつと混乱してた」

——いいってことよ。

まず何が起こったのか思い起こす。

僕たちは授業の一環としてここウソの災害や事故ルームに來たんだ。そこで13号先生の含蓄ある言葉を聞いて、さあ授業が始まるという時に大勢のヴィランが現れた。

僕たちが呆然としてる間に相澤先生が1人でヴィランの群れに突っ込んでいって、けどヴィランの1人が目の前に突然現れて。

そう、そうだ、あの黒いモヤみたいなヴィラン。あれに僕たちは飛ばされたんだ。大勢のヴィランの時も、僕たちが飛ばされた時も、あの黒いモヤが広がっていた。恐らく、アレは瞬間移動とかワームホールのようなモノだろう。アレに覆われる瞬間、13号先生が生徒をかばっているのがチラリと見えた。僕たちはその範囲外だったから飛ばされたんだ。

「そうだかつちゃん！ かつちゃんは!？」

飛ばされる前、モヤヴィランに突っ込もうとしていたかつちゃんの腕をつかみ止めたんだ。その直後に飛ばされたから、近くに居るはず。

「かつちゃん！ どこに居るのかつちゃん!？」

「るっせえ！ ここにおるわ!？」

大声でかつちゃんを探すと後ろから返事があった。

「よかった、無事だったんだね。近くで誰か見なかった?？」

「見当たらねえよ、オレとお前だけだ」

じゃあ僕たちの他にも、生徒だけでどこかに飛ばされた人がいるのか。早く助けに行かないと！

——まあ待て待て、ステイだ。USJは広い、散り散りになった奴らをどうやって探すつもりだ？

そ、それは……。でも、早く助けないと皆が危ない！

「大丈夫だよ」

「え？」

かつちゃんが僕を見ながら言う。その目は面倒臭そうに細められている。

「あいつらは大丈夫だっつてんだよ。仮にも雄英の生徒だ、心配すんな」

「で、でも」

「ちっ、面倒な奴だな。相澤先生が千切っては投げたところを見るに、ヴィラン共はチンピラ同然のザコだ。お前も分かるだろ」

確かにかつちゃんの言う通り、ヴィランの練度はそれほど高くなかった。あれだったら生徒だけでも対処できる可能性はある。

「……………うん、そうだね。授業での皆を見るにどうとでも出来そうだね。ゴメン、まだちよつと冷静さを欠いてた」

「謝んな面倒だ。それよりも、だ。テメエが叫んでくれたおかげで、ゾロゾロ集まって来

たぞ」

言われてヴィランに囲まれていることに気づいた。かなり多い。

はは、こんなになるまで気づかないなんて、師匠に殺されるレベルだな。

「……はあ、鍛え直しだなあこれは。かつちゃん聞いて」

僕の声に顔を向けるかつちゃん。あんな醜態晒しても僕の言葉を聞いてくれる、信用されている。それに応えなきゃいけない。

「かつちゃんの言う通り、皆は自力でどうにかするのを期待しよう。探す当ても無いんだ、それなら先生方と一刻も早く合流する方が先決だ。それに13号先生はあまり戦闘が得意じゃないだろし、相澤先生も僕たちを心配しながらじゃ危険かもしれない。それにあの一番手前にいた3人は雰囲気が他と違った、だから——」

「お前の話はいつも長い、さっさと簡潔に言えや」

「——目の前のヴィランさっさと倒して先生と合流する！」

「はっ」

「ならそう言えっつてんだデク！」

爆発の反動を使いヴィランの群れに飛んでいくかつちゃん。

「いやいや！ 連携して倒そうよ！ てか1人先にいかないで!!」

「連携なんざムリだ！ テメエがオレに合わせろ！」

「せめて一言いつてから動いてお願い!？」

「死ねえ!」

爆豪は特にヴィランが密集していた個所を爆破する。それによりヴィランが吹き飛んでいった。その威力に驚き固まっているヴィランの顔面に蹴りを入れる。着地し近くに居たヴィランの腹に右ストレートを打ち込み、そのまま爆破。

「このつ! 舐めんなあ!」

爆豪の後ろから襲い掛かるヴィラン、鋭い爪が生えた手を振り下ろす。

「それはこつちのセリフだボケが!」

それを大きな弧を描くように飛びあがって回避する。ヴィランの頭を掴み地面に叩きつけ気絶させる。

「ガキが!」

着地し固まっている爆豪の前にヴィランが現れる。その右腕は大きく膨れ上がっており、見るからに重そうな金棒を持っている。

「死ねええい!」

振り下ろされる得物、それに割って入ってくるのは緑谷だ。その姿は雷光を纏っている。振り下ろされるそれに緑谷は左の甲を添え、軽く体の外側に手首を曲げた。すると



直撃するはずだった金棒は軌道を大きくずらして傍の地面に着弾、地面を抉る。

「何、逸らされた!? 一体何キ口あると思つて——」

喚くヴィランの顔に拳が刺さる、縦に回転しながら吹き飛んでいった。

「ああもう! だから言つたじゃん危ないつて?!

「お前なら間に合うつて信じてたんだよ」

「それは嬉しいけど心臓に悪いからヤメテ!」

背中合わせに立ち上がる緑谷と爆豪。言い争う2人にヴィランはどよめいている。攻めてこないと分かった爆豪が突撃、それに追隨して緑谷が駆け抜ける。

爆豪が爆破で敵を蹴散らし、撃ち漏らしを緑谷が確実に倒す。近寄ってくるヴィランの攻撃は緑谷の流水岩碎拳に阻まれ届かない。幼馴染とあつて即席だが連携は取れていた。ヴィランが次々と倒れていく。

「クソ、がああああああああ!」

遠くにいたヴィランが奇声を上げる。その頭上には大きな岩が浮かんでいる。石を飛ばす個性で、この大きさを飛ばすには多くの体力と集中力を要す言わばヴィランの必殺技だ。

「潰れるおおおお!」

ヴィランが岩を高く打ち上げ、緑谷達の頭上から落とす。重力も相まって中々の速度

だ。まともに喰らえば跡も残らないだろう。

「裏谷君！ 応任せな！」

雰囲気が変わる緑谷。体の前で手を円のように動かすと、幾筋もの切れ込みが岩に入る。

「はっ！」

緑谷は岩の中心に蹴りを入れる、すると円状に岩が切れた。旋風鉄斬拳だ。人2人分程の大きさに斬り威力を削いだようだ。

「冗談だろおい……」

呆然とつぶやくヴィラン、そして穴から爆豪が飛び出してくる。その右腕はいくつもの砲身を纏っている。

「くたばれ雑魚共」

特大の爆発は残っていたヴィランを一掃した。

ヴィランを倒した僕たちは先生方と合流すべく急いでいた。その道中、僕はヴィランの言葉を思い出して苦い顔をする。

「……ねえかつちゃん」

「あ？ んだよ」

「ヴィランが言ってたオールマイトに死んでもらうって言葉、どう思う」

「んなもん荒唐無稽な話だろ。あの人を倒すなんて無理に決まってる」

「うん、僕もそう思う。思うんだけど……」

「……何か気になる事でもあるのか」

「こちらを見る目は懐疑的だ。普通に考えて、オールマイトを殺すなんて無理だろう。あの人の個性は単純な増強型だけど、それを極限まで高めたモノだ。全ての困難を一撃で吹き飛ばすNo. 1ヒーローだ。」

「敵のほとんどはチンピラ同然だった。けど、あの3人は別だと思う」

「中央にいた掌男、アレが首魁だと思う。妙に態度がデカかったし。次に黒モヤ男、瞬間移動ができる強力な個性で要注意人物だ。それよりも注意すべきは。」

「あの脳みそ野郎か」

「うん。3人の中でも特に危険だと思う。確証はないけど、アレを見た途端に怖気がしたんだ。もしかしたらアレがオールマイトを殺せる根拠なのかも」

「……つまりなんだ、危険だから行くのを止めようってか？」

「かつちゃんが非難するような目を向けてくる。正直、そうした方が賢いんだと思う。わざわざ危険に飛び込んでいくなんて馬鹿だ。でも、それでも。」

「いや、まさか。敵は僕らが考えるより強力かもしれないから、注意しておこうねって話」

だよ」

僕たちが目指すヒーローはその馬鹿になる事なんだ。ここで怖がってちや先に進めない。

「分かってんならいいんだよ」

「でも、ケガしたらダメだからね」

「何だよケガって馬鹿にしてんのかクソナード」

「だってかっちゃんのお母さんに君をよろしくって言われてるんだ」

「んなっ！ あ、あのババア帰ったら一発殴る！」

## 広場での戦い

「そんな、13号先生と相澤先生が……」

飛ばされる前にいた広場に戻ってきた僕たちが見たのは、倒れ伏す先生たちの姿だった。

僕たちは広場より高い場所にいる。状況を俯瞰的に見られるのは良いが、状況が最悪なものも見て取れる。相澤先生は脳みそヴィランに、13号先生は黒モヤヴィランにやられてしまったようだ。今すぐにでも助けに行きたいけど、今行ってもすぐに殺されてしまうだろう。

「だったらまずは情報収集だ。かつちゃん、この状況どう見る？」

「……………掌と脳みそはよく分からん、情報が無くて判断できねえ。けど、黒モヤはある程度推理できる」

そう言つてこつちを見るかつちゃん。僕の意見を言えと目が言っているので言葉を繋ぐ。

「あっちの個性はワームホールだと思う。あのモヤに触れるのがトリガーなのは間違いない。…………正直スゴイ個性だよ。でも、ひとつだけ気になるところがある」

言ったところで僕の首を指すかつちゃん。

「あいつが身に纏ってる装飾だな」

「うん。モヤに触れたらアウトだったら、アレが転移していないのはおかしい」

「てことはあの個所は触れてもセーフってことだな？」

「恐らく。首だけじゃなくて、顔と胴体もセーフなんじゃないかな」

「てことは、だ。気づかれていない今なら、あの野郎だけはぶっ倒せるってことだな……！」

好戦的な笑みを浮かべるかつちゃん。手から小さな爆発が起こっているのを見るに本気なんだろう。

正直危険な賭けだ。この推理も自信はあるけど確証はないし、失敗した時のリスクが大きすぎる。先生にかばわれていた飯田君が見当たらないのは、助けを呼びに学校へ向かったんだらう。長距離最速の飯田君であればすぐに学校に着くはず、ヴィランの襲撃にあつたと知れば先生方がすっ飛んで来る。それを待つのが一番なんだろう。

「けどそんな時間はないよね」

——だ。先生は動けない、生徒だけでは歯が立たない、けれど時間稼ぎはしなくちゃならん。

「だったら黒モヤを倒せそうなのこの機会を逃す手はない！ かつちゃん！」

「ああ、一撃の威力はオレのが大きい。お前が囧でオレが本命、でいいな？」  
「うん！ それじゃあもう少し移動し——」

掌ヴィランが動いたのを視界が捉えた。その先には隠れている尾白君、蛙吹さん、峰田君がいる。皆がヴィランの動きに気づいた様子はない。

即座にフルカウルを発動し、皆のところへ跳躍する。

「んなつ！ おいコラデク！ テメエ何処に行つ」

かつちやんの制止を振り切る。今行かないと皆が危ないつ！

目の前に現れたヴィランに体を硬直させる皆。それを見たヴィランが嫌らしく嗤つて手を伸ばす。

「させるかあ!!」

「何っ!?!」

その手が届く前に間合いに入り込む。勢いを乗せた拳がヴィランの顔に拳を振るう。これで少なくともダメージを与えられるはず！

しかし、その拳は黒い壁に阻まれた。

「なん、この感触は……!」

まるで厚手のゴムを殴った様な感覚がする。防御されたわけではなく、僕の拳はヴィランの腹に叩き込まれている。ヴィランの顔を見るもその表情に変化はない、ノーダメージなのは明らかだ。

「おいおい、驚かすなよクソガキ」

脳みそヴィランから跳び退き距離をとる。掌ヴィランがイライラした声色で言い放つ。その言葉は恐ろしい程殺意を帯びている。

皆の方をチラリと見れば、逃げてくれたようで姿は見えなかった。それだけは良かった。

——危険になったのが入れ替わっただけだ！ 気を抜くなよ!!

「たつくよお……、ガキつてのはホントにイラつかせる天才だよな」

ヴィランが首を掻きむしりながら呟く。掻いたところからは出血している。異様で痛ましいその姿に緊張が高まっていく。

そして、相手の動きがピタリと止む。

「脳無、そのガキ殺せ」

とてもあつさりとした言葉、その言葉に反応して脳無と呼ばれたヴィランが動き出す。

瞬間、全身が栗立つ。警鐘がガンガン鳴り響き死の気配が色濃く現れる。



瞬く間に距離を消し飛ばす脳無。振り上げられた右手は僕の頭に狙いを定めている。

ダメだアレを喰らったら死ぬ

どうする逸らすか

無理だ不可能だ絶対出来ない

なら避けるか

ダメだ返す太刀で殺される

じゃあどうする!?

—— 出久!

「あああああああああ!?!」

信じられないような絶叫が喉から出る。恐怖を振り払うように、喉が枯れんばかりに叫ぶ。

左手を向かって来る右ストレートに沿え流れを変えようとする。しかし攻撃はビクともしない。

ならばと右手も沿える。次いでとばかりに体全身を使って攻撃を逸らすことに全力を注ぐ。

僕の必死の抵抗は実を結び、ヴィランの攻撃がストレスで通り過ぎていく。風を切る音が鳴り響き、僕は攻撃の余波で真横に吹っ飛ぶ。

「あ、ぐっ!？」

無様に転がりながらもすぐに立ち上がり構えをとる。

良かった、何とか受け流せた。腕が痺れているけど、驚くことに被害はほぼゼロ。

——よくやった！ 後でキスしてやる！

いやどうやってだよ。

掌ヴィランが呆然とした様子で言う。

「……………は？ 何で生きてんの？ おかしいだろ!？ 先生は不良品でも押し付けたのか!？」

半狂乱に叫ぶヴィラン。けどそれもすぐに収まる。

「……………いや、先生に限ってそれはないか。プロヒーローも紙切れみてえに吹き飛ばしたしな。て事はこのガキがやるのか。ちっ忌々しいガキだ」

こちらを見るヴィラン。その目はギラギラと輝きながら殺意に濡れている。

「なに立ち尽くしてるんだ脳無、さっさと殺せ」

再び動き出す脳無。今度こそ僕を殺すまで止まらないだろう。

——回避だけに全神経を注げよ！ それでも正直ギリ貧乏だけど！

脳無が右の拳を振るうが、右に逸らして背後を取る。がら空きの背中に流水岩碎拳をお見舞いするが、やはりノーダメージのようだ。振り向きざまの裏拳を後ろに跳んで回避、今度はこちらから距離を詰め頭部に殴りかかる。直撃したがダメージを与えた様子はない。

「脳みそ直撃したはずなんだけどなあ?!」

カウンター気味に放たれた左フックを転がって避けるも、その先で蹴りが迫ってくる。それをどうにか受け止め、敢えて吹き飛ばされることで大きく距離を開けた。

——いやいやいや何反撃試みてんの!?

大丈夫、筋肉は裂けて骨は軋んでるけど問題ないよ。ちゃんと避けられてる、パワーは規格外だけど技術もへったくれもないテレフォンパンチ。素人の殴打なんて僕の流水岩碎拳でどうにでもできる。

——アドレナリン効きすぎてハイになつとるやんけ!?! 骨折つてんのに何が大丈夫なの!?! どうにでもできてないやん!?!

それに敵の情報収集にもなる。今分かったのは2つ、打撃は無効だつて事と身体能力が高いつて事。打撃の無効化は個性だと思う、殴った感触はゴムみたいで全ての攻撃が無効化されてる。身体能力は正直分らない、素の身体能力にしては高すぎるし打撃無効化の個性だから異形型の個性つて線も薄いし、ホントに分らない。

——この状況で分析できるのは頼もしいけどさ君イ……!! ……よっしや腹括りなおした。こつからどうするよ、マジでジリ貧だぞ

………こればかりは助けが来るのを待つしかない。それまで無事でいる保証はないけど、やらなきゃやられる!

裏谷君は折れたと言っているけどまだ折れてはいない、ただ罅が入っているだけだ。とは言ったもののあと2回か3回腕を使えば折れるだろう。折れると同時に僕の命もポックリ逝きそうだから回避優先で動くしかない。……あのスピードを避け続けるのは難しいけど。三度脳無が動き出す。

真つすぐ向かって来る脳無だったが、突然その半身を凍てつかせ停止した。

「え」

「はあ?」

驚いた僕とイラつく掌男が同じ方向を見る。そこには轟君がいた。

「無事か、緑谷」

「とつ轟君!」

——お、おとおお!! 流石イケメン登場シーンもイケメンだあ!! 好き! 惚れた

! 後でキスします!

キスするのは僕なので止めていただきたい。

いや、でも正直助かった。脳無はその活動を完全に停止させている。氷結は効くように凄いいつとずする。これで脳無は行動できない。この戦い、我々の勝利だ！

「はあ」

掌男が息を吐いた。残るはコイツだけ、こちらにはクソ強轟様がいらつしやるおかげで負ける気がしない。

「本っ当に……ガキつて奴はよお………」

「さっさとそいつら殺せや脳無ウ!!」

脳無が凍った半身を自ら砕いた。

「え!？」

「っ！ 何考えてんだこいつ！」

体の半分を失った脳見が倒れ伏す。いや、砕いたのは左半身で心臓部分までも砕いてしまっている。これじゃ自殺じゃないか！ このヴィランは一体何をして——、そこで思考を中断させられる。

脳無が、脳無の砕けた半身が、見る見るうちに再生しているから。

「うそ、でしょ……。再生の個性まで持つてるなんて、そんな、反則……」

絶望感からか声漏れ出る。

——規格外のパワー、打撃の無効化、心臓を失っても無事ですむ再生能力。確かにこれはオールマイトじゃないと対処不可能な案件だな

いつも明るい声を出す裏谷君も、今は声が硬い。気付くと腕が震えていた。今更ながら敵の強大さを知り、怖がっているんだ。

——しつかりしろ出久！ 自分じゃ敵わないヴィランが出てくるなんて、ずっと前から分かってただろ!! ビビッてちや何も出来やしない！

……そうだった。何を恐れてるんだ僕は！ 僕なんかちつぽけな存在だって分かってるだろ！

頬を叩いて切り替える。大丈夫、何なら10年間も僕たちより強い人と稽古してたんだ、今更だ！ そうこうしている内に脳無が完全復活した。回復した脳無は轟君に向かって走り出す。

「くそっ」

氷を生み出す轟君だけど、脳無は走る衝撃だけで粉碎、何事も無かったかのように進み続ける。脳無を足止めできるのは轟君だけ、脅威と判断したから先に潰す気なんだ！

そうなったら僕たちの勝機はゼロになる。それだけは避けなければ……！

走り出すも到底間に合う距離ではない。だったら、裏谷君!!

意識が切り替わる。表が裏に、裏が表に。切り替わるタイミングで生じるタイムラグがこの時だけはゼロに近い時間になる。

「やらせるかよお!!」

裏谷君が腕を振り下ろし旋風が脳無に迫る。風は脳無に容易く追いつき、脳無の左足を切り落とした。

「え」

足をなくした脳無は転がっている。それよりも、攻撃が通用した？

「え〜つと……。効果は薄いだろうけど、せめて牽制にでもなりやいな〜って思ってたんすよ。だから結構本気でやりましたよう？ でも効き目があるなんて聞いてないっす」

裏谷君が気の抜けた声を出している。あんなに硬い声だったのに驚きの変化だ。

そんな事より何で効いたんだ？ 流水岩碎拳は無効化されて、旋風鉄斬拳は有効？ 2つの違いと言ったら……。

「ま、まあいい！ 効果があるって分かったんならこっちのモンよ！」

起き上がった脳無の右足を切り飛ばす。脳無はこちらを見ていて、明らかにタゲは僕たちに向いている。

状況の変化をよそに、ある考えを閃く。そうか、だからあの感触だったんだ！ 裏谷

君！

「お、おうどうした出久。何かいい作戦でも思いついたか？」

それもあるけど、何で旋風鉄斬拳が効いたのか分かったよ！

「おお！ で、なして効いたん？」

無効化だと思ってたあの個性は、おそらく吸収の個性なんだ。殴った時のゴムみたいな感触、あれは本当にゴムみたいに衝撃を吸収してるからあの感触だったんだ。だから凍らせる戦法が有効だし、衝撃を一点に集中させれば限界を超えてダメージを与えられたんだ！

「なるほどなあ。でもね、考察は後にして作戦考えてくれませんか？」

もちろん考えてあるよ。脅威と感じる方に向かうなら、その脅威が2人いればいい。動きを止める轟君と、ダメージを与えられる裏谷君の2人が居ればどっちに攻撃すればいいか迷うはず。それでどっち付かずの状況にすれば封殺できるはず！

「お、おう？ でもそんな簡単に引つかかるか？ 敵さんもそこまでバカじゃないと思うんだけど」

脳無は絶対に掌ヴィランが命令してから動いてる。命令を聞いてから動くロボットみたいなモノなんだ。だから単純な動きしか自分ではできない、はず。

「でもよ、相手は人……。いや、そうか、怪人つてまさか……」



……うん、たぶん字が違う。怪人じゃなくて改人、改造人間なんだ。

「——俄然負ける訳にはいかなかったなあ……！」

語気を強める。彼の熱に当てられてか、こっちまで勝ちたいという気持ちが高まっていく。

うん！ その為には脳無に的を絞らせないことが重要だよ。轟君と常に対角線上になるように動き回って攻撃された方をフォロワー、というか手足を奪って注意を惹くんだ。

「よし来た、轟！ 作戦伝えるぞ！」

「……はあ、いいよ。だいたい分かっているから。それに敵の目の前で作戦バラしてどうすんだよ」

「そ、それもそつすね……」

再生した脳無が吠えて僕たちに向かって来る。

「つしやあつ！」

横なぎに腕を振るい風を起こす。足を狙ったソレは跳んで躲されるも予測していたので、上空にいる脳無を切り裂き、伴う暴風で押し返す。そして着地したところを轟君が凍らせた。的を絞らせないように走り回る裏谷君と轟君。作戦を伝えていないにも関わらず、轟君は完璧に動いてくれた。

それからは脳無を封殺することに成功していた。

切り裂いては凍らし、凍らしては切り裂いて。たった2人、いや僕も入れて3人の共同戦線は上手く嵌った。特に轟君が凄い。裏谷君は微妙に脳筋だから僕が指示を出し、轟君がサポートしてくれている。あと少しでもタイミングがずれたら危ない場面が沢山あった。裏谷君も活躍している、彼の脳無をも両断する攻撃は大いに時間稼ぎしてくれて助かっている。普段は攻撃力が高すぎるから、と抑えているモノを全力で扱えて心なしか嬉しそうだ。

ここで脳無が大きく腕を打ち出し、衝撃波を放ってきた。

「んなこともできんのかよっ」

裏谷君はそれを後ろに跳んで回避。続けられる衝撃波ラッシュもバク転を繰り返して回避する。

「!? 何してるー!」

「あつヤベ」

「!? 轟君と射線が重なっちゃった!?」

猛ダッシュで向かって来る脳無、それを見た裏谷君はそれに向かつて走り出した。

え、なにやってるん?

「おいバカ何やって——」

「信じてるぜ轟い!!」

そのまま僕たちは走る。あと数瞬で激突する瞬間にジャンプして脳無の頭上に跳び上がる。そして僕たちの体に隠されていた氷に脳無は捕らわれ、ついだとばかりに裏谷君は腕を切り落とした。

「今のは危なかった!」

ほんとにね! 周りをよく見ろって僕に言ったのは君だからね!?

「いや、ホント悪かったって」

「いいなあ、弱い者いじめかあ?」

真横から声がする。ザラついた嫌な声が。

「俺も混ぜてくれよ」

掌ヴィランがそこにいた。

さつきまで遠くにいたのに! こいつも身体能力が高い!

ヴィランに右腕を捕まれる。

「いんのつ」

振り払おうとするも凄い握力で離れない。

すると、掴まれた部分から腕が崩壊し始めた。

「いい加減に、しろや!!」

掴まれた右腕の指を勢いよく下ろす。ヴィランの左肩を大きく切り裂いて血が噴き出る。

「痛つてえ!」

「離れろつて言つてんだ!」

がら空きの腹部に蹴りを入れられたヴィランは吹き飛んでいく。僕は右の前腕を見た。ひび割れ、皮膚が崩れ落ち、筋肉が露出している。このケガは相澤先生の!? このヴィランがやったのか!

「ああ、ホントに痛つてえなあ——」

吹き飛びながらヴィランが笑っている。それはとても不気味で——

「そう思うだろ、脳無」

「裏谷!!」

轟君の声に反応し振り向く。

すぐそこまで脳無が迫っていた。

突然動きが緩慢になる。僕たちだけじゃない。脳無も、轟君の口の動きも、吹き飛ぶヴァイランも、全てスローモーションだ。

漠然と、これが走馬灯を見る前兆であると理解する。だけどそんなモノを見ている暇はない。過去の記憶を見ても打開策は浮かばない。だったら今、この場を見る！

スローモーションになった脳無の攻撃は、確実に当たる。回避は望めない。

防御は間に合うだろうが、それは気休め以下の効果しかない。ならどうすか。

「  
」  
裏谷君が叫ぶ。

旋風鉄斬拳は攻撃に特化した拳法だ。やられる前に殺れ、を地で行き、そのあまりの攻撃性能にセーブしながら使用しないと相手を殺してしまう程で、ヒーローには向いていない拳。

だが、その攻撃が防御に使われたら？ 攻撃は最大の防御を行ったとしたら？

向かって来る右ストレートに合わせるように両腕を突き出す。

両腕は狙った通りに拳を真正面から受け止める。

肉がブチブチと裂ける音がする。

骨がバキバキと碎ける音がする。

崩れた腕から血が噴き出し顔を濡らす。

裏谷君はまだ叫ぶ。

手首を合わせるように受け止めた両腕を、拳の上で滑らすように回転させる。指に纏わりつく風を解き放つ。

脳無の腕から血が噴き出し地面を濡らす。

輪切りになった腕が幾つも散乱する。

世界が速さを取り戻していく。僕たちと脳無から出る血が辺り一面を赤色に染め上げる。腕の痛みが襲ってくる。

緊張の糸が切れた。裏谷君はできることを全てやり尽くした。そのおかげで脳無の一撃を防げたんだから。

ドンツと音がした。脳無の足が地面を砕いた音だった。

そこでもうやく気づく。脳無の、もう1つの能力。

自身の半身を躊躇いなく砕いたのも、手足を切断されても臆することなく向かってきたのも。

痛みがないのだ。痛みがないから怯まないんだ。

だから、これも当然の事なんだろう。

脳無が右足を弓なりになるまで後ろに引く。

溜めた力が解き放たれる。

こちらにそれを防ぐ術はない。

「……………ちくしょう」

爆弾でも受けたかのような衝撃が腹を貫く。

視界が物凄い速さで流れていく。

その中で掌ヴィランの笑みだけが酷く鮮明に見える――

――それも水飛沫で見えなくなつた。

## 平和の象徴

「裏谷！」

轟の叫びも虚しく緑髪の少年が吹き飛んでいく。水切りの石のように水面を跳ねていき、最後は派手に水飛沫を上げ姿を消した。

「はあく、やつと一匹かよ」

学生1人を殺すのに時間をかけ過ぎだと言外に言つてはいるものの、その口は凄惨な笑みを浮かべている。

斬られた腕を再生しながら脳無は轟を見る。2人がかりで何とか凌いでいた相手を轟は1人で戦わなければならなくなった。ぼろ雑巾みたいに飛んで行つた裏谷を思い出し心臓が早鐘を打つ。

いつでも迎撃できるよう身構えていた轟の耳に爆発音が聞こえてきた。影が一瞬かかったと思えば目の前に人が落ちてくる。クラスメイトの爆豪勝己だ。

「爆豪、お前」

「このクソ共が——」

彼女の両腕からは幾つもの砲身が生えている。忘れもしない、最初の戦闘訓練で見たあ



の超爆発を使うつもりだ。爆豪にほど近い場所にいた轟は、爆破の余波に巻き込まれないように一歩後退しようとするも爆豪が叫び声を上げた。

「——くたばれえええええ!!」

まずは熱、次いで衝撃が全身を打ち付ける。爆豪の最大火力は安全圏にいる轟にさえ軽微なダメージを負わせる程の苛烈なもので、正面にいたヴィランはひとたまりもないだろう。

ヴィランが脳無で無ければ。

爆破で生まれた煙幕が晴れる。そこには両腕を無くし全身を酷く焼かれた脳無がいた。しかし、その傷も逆再生しているかのように修復されていて、脳無の後ろにいる掌男は無傷でいる。脳無が咄嗟に庇ったのだろう。

「チツッ! さっさと死ねやクソ共が!」

「おいおい、なんだこの口の悪いガキは。しかも手癖も悪いときた、最悪だな」

「んだとテメエ!」

見てくれはいいんだけどなあと呟きながら掌男、死柄木弔は首を掻きむしる。これは死柄木がイライラしている時に見せる癖で、次から次へと出てくる乱入者にキレかけているのだ。

「死柄木弔」

そんな死柄木に声をかける人物が黒い霧を纏って現れた。プロヒーロー13号を倒し、今まで爆豪に拘束されていたヴィラン黒霧だ。

「黒霧、お前今まで何してたの」

「……すみません拘束されてました」

「はあ？ プロヒーローはやったんだろ、何だガキ共に捕まってたのか？」

「面目ありません。それともう1つ、生徒1名に逃げられました。じきにプロヒーローが大挙して来るでしょう」

「……………はああ」

深い溜息を吐いた死柄木は再度首を掻きむしる。先ほどより勢いが増したそれは、首の皮を突き破って血を流す。

「お前がワープゲートじゃなきゃ殺してたぞ……。まあいいや、ガキ共殺してさっさと帰るか。あの数のプロヒーロー相手は流石に分が悪い」

そう言つて視線を向けた先では既に話し合いが終わっていた。

「もう一度確認するけど、直に委員長が増援連れてくるつて事でいいんだな」

「何回も言わせんな。オレが霧ヴィランを抑える前にUSJを脱出した。クソメガネならもう校舎に着いてる頃だろうよ」

爆豪と轟の2人は油断することなくヴィランを注視し続けている。今まで爆豪は黒

霧を抑えていたが、裏谷が吹き飛んだ事を察知すると轟の増援に飛んで来た。あのままでは轟が脳無に殺されると思ったのもあるが、他の打算もあつての事だった。

「相手も馬鹿じゃねえ、教師陣が来れば形勢が逆転するのは分かつてる。だが脱出口を抑えられてるとなりや、出口までクラスの奴らを殺しながら強行突破するかもしれない」

「……それが最悪の結果なのは分かる。だから俺達にターゲットを絞らせて何とか凌ぐつて事でいいんだな」

「ああ。あと少し時間を稼げばオレ達の勝ちだ」

「一応言つとくけど、勝ち目はゼロに等しいぞ」

確かに爆豪の爆炎なら脳無を焼けるだろう。緑谷と轟がやっていた戦法でいけばどうにかなるかもしれない。

しかし相手は3人だ。死柄木の乱入で、薄氷の上にあつた拮抗は容易く崩れた。そして今は黒霧までいる。時間を稼ぐにしても絶望的な状況だ。

それでもなお爆豪勝己は笑う。

「はっ！ 負け戦上等！ ピンチを乗り越えてこそそのヒーローだろうが！」

爆豪の気炎に反応して爆破が起きる。彼女の名の通り勝気な笑みを浮かべているその様は大変頼もしい。

轟もつられて口の端を吊り上げる。さつきまで苦虫を噛み潰した様な顔をしていたというのに、何故か自分たちならやれると思えてくる。この2人であれば、細い光を手繰り寄せられると。

「威勢がいいねえ、そういうの好きじゃないぜ」

目の前に闇が広がる。

爆豪と轟は咄嗟に回避するも、闇から伸びる黒い腕に爆豪の脚が掴まれる。

「五月蠅いガキは大嫌いなんだ」

脚の保護より相手にダメージを与える目的で着けているグリーブがひしゃげる。痛みに顔を顰める爆豪は脱出せんと黒い腕を爆破するも効果はない。

「だから、まずその口を利けなくしてやるよ」

闇からもう一本の腕が生える。その握り拳は爆豪の顔に迫る。爆豪の反射神経なら防御は可能だが、それでも戦闘不能になるのは間違いない。

オールマイイトに比肩するパワーを秘めた拳は顔面まであと数cmのところまで切り飛ばされた。

「っー」

脚を掴んでいた腕も切られ、拘束がなくなった爆豪は緊急離脱。腕を切断した人物を見て笑う。

「ああそうとも。オレは信じてたぜ、テメエがくたばったはずがねえってな！」

死柄木も下手人を見る。ここに来てから溜息が多くなったかと思いつつ、今日一番の溜息を吐く。

「……………何回苛立たせれば気が済むんだよ」

「デクー！」

「クソチビィー！」

「はあ、……………ハアア……………！ 声がデケえっての……………傷に沁みるんだよ」

両腕をボキボキに折られながら、内臓に甚大なダメージを負いながら、しかし諦めた様子はなく瞳には強い意志を宿した緑谷出久——いや、裏谷が現れた。

「流石に、……………はあ、今回は、死んだかと、……………グツ、思ったぜ……………」

「じゃあそのまま死んどけよクソチビ」

這う這うの体でありながら、足で旋風鉄斬拳を放ち脳無の両腕を斬った裏谷に死柄木は毒を吐く。それには心底死んでほしいという感情が表れている。

それを聞いた裏谷は不敵に笑って言った。

「そりゃ聞けない、相談だね、ハア……………まあ、出久が立ち上がる、ハア、理由とは、グ

フツ………違うけどな」

「喋るんじゃないよ聞き取りづらい、聞くに堪えない」

「そーかい、でもお前にも、分かる話だぞ」

「ああ？」

「自分が、気に食わない、ハア……、相手。アンタにとつちやオールマイトかな？ ハア、

そのオールマイトに、虫けらみたいに、ハア、踏みつぶされたと、する」

裏谷は時間稼ぎのつもりで話しかけている。それを理解している死柄木だが、鬼気迫る裏谷の様子に聞いてしまう。

「はあ……… アンタは、踏みつぶされて、地面に這い蹲ってる。文字通り、虫けらみたいな。それで、アンタは、アンタならどうするよ。そのまま、這い蹲ってるか？ 俺には無、理だね。例えば死にかけ、ハア、だとしても、立ち上がるよな？」

「大っ嫌いな相手に見下されるって、ムカつくと思わないかい？」

「……………ぶつ、あつははははははは!! 何だその理由!? あははははは! 確かにそりや立ち上がるわな! あつははははははは!!」

呵々大笑。そんな様子の死柄木に、そんなに笑うことですかねえと呟く裏谷は血を吐いた。

「はははははは! はあああ……………。うん、面白かったぜ。笑わしてくれた礼だ。苦し

「まずに殺してやるよ」

——あのチビを殺せ脳無

指示に従い裏谷に襲い掛かる脳無。爆豪と轟が足止めを試みるも黒霧に阻まれてしまふ。

向かって来る脳無を見ながらも、裏谷は冷静だった。

「……………。アンタらにや分らないと思うけどよ、俺には、俺達には分かるんだ」

裏谷に防ぐ手立てはない。ここで緑谷と変わつても腕がこの有様では受け流しは出来ない。

「聞こえるか、この音が。感じるか、この熱を。…………お前達にはみえないか、正義の灯が」  
裏谷には恐怖は微塵も無い。確信しているからだ、この戦いに勝つ確信を。

「来るぜ、あの人が」

轟音と共にUSJの入り口である扉が吹き飛んだ。

扉は飛距離を伸ばしに伸ばし広場に、裏谷と脳無の間に突き刺さる。

「——もう安心しなさい」

裏谷の前に大きな背中が現れた。その人物は扉に手をかけ横に退ける。そうすることでヴィラン達にもその姿を見せた。

「私が来た」

正義の象徴、オールマイトが到着した。

「ハア、オールマイト……………、話さなきゃいけない事が…………」

「ああ、勿論聞かせてもらおうとも。その前に、っと」

裏谷を小脇に抱えたオールマイトはヴィランの視界から姿を消した。慌てて探せば、少し離れたところに爆豪と轟、相澤も回収したオールマイトがいた。

「ははっ、んだその速さ。チートかってんだ」

負傷している裏谷・相澤を爆豪と轟に渡し、オールマイトはヴィランのいる広場の中で心に返ろうとする。

「待って、ください……………！ オールマイト！」

「うん？ その目尻は裏谷少年だね。言いたい事があるのは分かっているけど、先ずは傷の治療が先だぜ。話ならその後で沢山しよう！」

そうサムズアップを残して再度向かおうとするオールマイトの服を血に濡れた手が掴む。

「聞いて、下さいい！」



「……裏谷少年、あまり無理をするな」

「ヴィランの、情報を伝えたいんです！」

裏谷の言葉に目を瞬かせる。

「その傷はあのヴィランに立ち向かったからなのか……。頑張ったね、それじゃあ聞かせて貰えるかな？」

オールマイの笑顔に安心して気絶しそうになるが耐える。ヴィランの、特に脳無の情報は伝えなければならぬ。

「あの黒い霧はワームホール、掌は触れたものを壊す個性だと、思われます。そして、あの脳みそは複数の、ハア、個性を持っています。オールマイと同レベルの身体能力、打撃の吸収、再生能力、この3つです。ハアはあ、打撃の吸収には、限度があります」

そこまで言って血反吐を吐き膝をつく裏谷。爆豪が慌てて駆け寄ってくる。

「そうか、そこまで情報を引き出してくれたんだね。おかげで勝ちも確定したも同然だよ」

「……………オールマイト」

「うん？ まだ何かあるのかい？」

「必ず、必ず勝ってください。出久、頑張りました。だから、アイツに、いいところ見せてやって下さい」

爆豪に背負われた裏谷が、最後に笑いながら言つて氣を失つた。

「……………ああ。勿論、約束しよう。爆豪少女、轟少年、彼らを頼んだよ」

今度こそ戦場に戻つていく。その背中を見送りながら2人は入り口付近にいるクラスメイトと合流するべく走り出した。

「ようこそオールマイト、待ちくたびれて生徒と遊んでたよ。随分遅かつたじゃないか」

「……………」

「だんまりかよ、つまんねえな」

何も答えないオールマイトをつまらなさそうに見やる死柄木。

「ま、いいか。オールマイト、今日はお前を殺すために馳せ参じたんだ。この脳無が、お前を殺す兵器だ」

「……………ほう、私を殺せるのかい?」

オールマイトの笑みが深まる。本来、笑顔は相手を威嚇する為の表情だという。今のオールマイトはまさに全ての者を委縮させる笑顔をしている。

それでも死柄木の余裕は崩れない。オールマイトを殺せると確信がある為に。

「もちろん殺せるとも! あのチビから脳無の個性は聞いたみたいだけど、実はもう一つあるんだよ。……………脳無」

すると脳無の巨体が更に膨張する。その体格はオールマイトをも超えている。そして体の色も変わっていく。黒一色だった肌が毒々しい紫に、体にライトグリーンの線が幾筋も奔っていく。

「これは怪物化の個性だ。本来はここまで異常な反応は見せないんだが、突然変異したみたいだね。これには先生達も驚いてたよ」

怪物性を飛躍させた脳無が咆哮する。物理的な圧を伴ったソレは地面を砕く。

「はははは！ スゲエなおい！ これで確実にお前を殺せるー！」

これ以上嬉しいことはない、と言わんばかりに声を上げる死柄木。

「こうなった脳無は俺の命令も聞かない！ 破壊衝動が収まるまで暴れ続ける！ だいたい1週間かなあ？ ククツ、それまでに一体何人死ぬだろうなあ……」

「……………それにしても遅い、か。確かに、確かに今回は遅すぎるんじゃないか私……！」

腰を落とし力を入れる。

体中から紫電が迸り、彼の立っている場所が大きく陥没してゆく。

オールマイトの普段は見えない眼が光を放つ。余りにも強いそれは残光を出しつつ尚強く輝く。

「さあ殺せ脳無！ 正義の篝火を消し飛ばせ!!」

「約束したからね。ちよつと本気、出してみるか!!」

両者の姿が掻き消える。

そして死柄木の真横を何かが通り過ぎて行つた。

生じる衝撃波に巻き込まれるもどうにかして着地する。

吹き飛んでいった者を見れば紫の改人が倒れていた。

「は?」

思っていたことと異なる結果に固まる死柄木。

「——4」

右腕を振りぬいた姿で残心するオールマイトが呟く。

体の上に積もつた瓦礫を吹き飛ばし、脳無が再びオールマイトに突進する。先程は右ストリートを屈んで躲され、鳩尾に一撃貰つてしまった。そのことを反省し、今度は両腕で攻撃する脳無。時間差で攻撃することで回避不可能になっている。

脳無の攻撃を両腕で防ぐオールマイト。衝撃で辺り一面にひび割れが生じる。ダメージが見られないオールマイトは両手の指を立て振り下ろす。それは脳無の腕を容易く両断した。

「3」

両腕を失った脳無は左脚をアンカーのように地面に突き刺し、右脚を限界まで振り上げる。裏谷を瀕死にまで追い込んだあの技だ。今の脳無はあの時の比ではない破壊力をその脚に秘めていて、オールマイトでもまともに喰らえばダメージは必至だ。

オールマイトは向かつて来る剛槍の如き蹴りを、膝を踏み抜く事で半ばから叩き折つた。

「2」

残る脚は地面深くに刺さり、他の四肢を失った脳無はアッパーカットでかち上げられる。

「1」

無防備な脳無を前にオールマイトは右腕に力を入れた。

腕の筋肉が膨張し、着ていたシャツが悲鳴を上げる。

腕に溜まった膨大な熱量にシャツが敗北し弾け飛ぶ。

そして、オールマイトは壮絶に笑った。

「SMASH!!!」

「脳無は遙か彼方に吹っ飛んでいった。  
5発か。私もやればできるじゃないか。全盛期と変わらない動きだったよ」

## 事件が終わって

USJ襲撃事件は雄英の教師陣が駆けつけた事により解決した。A組の生徒20人の内、怪我を負ったのは僕だけだった。ヴィラン連合と名乗る集団の大半は頭数を揃えただけのチンピラで、雄英の生徒の相手を務めるには力不足だったらしい。……まあ負傷した人の度合いは酷いものだが。

相澤先生と13号先生はICUに運ばれる程の大ケガで、特に相澤先生は後遺症が残るらしい。お見舞いに来てくれたクラスの皆が教えてくれた。

僕も内臓を手酷くやられたみたいで3日間目を覚まさなかつた。心配させた様で、母さんは病室の床を水浸しにする勢いで泣いていた。母さんだけじゃない、クラスの皆に心配かけた。特に仲の良い麗日さんや飯田君、尾白君にも泣かれてしまった。

……もう涙を見ないで済むように強くならなきゃ。

今の僕は入院中だけど、あと数日で退院できる程度には回復している。できるなら今すぐ退院して鍛錬したいんだけど……。

——目を覚ましたてまだ2日なんだから。あんまり無茶しちゃイカンぞ君

分かってはいるんだけどね。USJ襲撃事件で僕たちの力不足を実感させられたか

ら。早く修行したいんだ。

——その事なんだけどさ出久、ちよつと相談があつてよ

そこでドアがノックされた。裏谷君との話を中断して入ってくるように促す。

「やあ緑谷少年、元気かい？」

「オールマイト！」

「目覚めたばかりなのに事情聴取に協力してくれてありがとう。お陰で有力な情報を得られたと言っていたよ」

「いえ、力になったのならよかつたです」

トウルーフォームで来てくれたオールマイトと話を続ける。僕のケガの具合、クラスメイトの状況、オールマイトと脳無の戦い。僕としては脳無との戦いについて詳しく聞きたかつたけど、なぜか恥ずかしがってあまり話してくれなかつた。何でだろう？

——あー、アレじゃないか？ 生徒が頑張つてるのに遅れたのを恥じてるんじゃないかな  
いかと

な、なるほど。オールマイト責任感強そうだしあり得そう。

「さて。緑谷少年、実は大切な話があつてね。私と君たちに関する、大切な話だ」

「オールマイトと僕たちに……。つまり」

「ああ、君の個性、ワン・フォー・オールにまつわる事だよ」



オールマイトの真剣な様子に姿勢を正す。今この時に話すという事はヴィラン連合に関係しているのだろうか？

「まず確認させて欲しい。掌を幾つも着けたヴィラン、死柄木弔は先生と言っていたんだね？」

「は、はい。先生は欠陥品でも寄越したのかつて怒鳴ってました。……あの、それとワン・フォー・オールにどういった関係が」

「……少しの時間だけだが、相澤君の意識が戻ったんだ。その時に当時の状況を聞いてね。相澤君によれば死柄木はこう言っていたらしい」

『今のオールマイトなら殺せる』

「っ！ それって!?!」

「ああ。今の私の状態について知っていると見て間違いない」

「でも！ でも、その事を伝えたのは……」

「私の親友と恩人を除けばヒーロー科の教師だけだよ」

「じゃあその中の誰かが裏切ったんですか!?!」

「そんなワケないさ。あの中に裏切り者がいるとは考えづらい」

「じゃあ一体誰が」

オールマイトが左脇腹を押さえる。その服の下には痛々しい手術痕がある。

「まさか……」

「そう。そのまさかさ」

オールマイトは立ち上がり、窓から外を眺める。夕日が薄暗くなった空に映えている。綺麗だが僅かに不気味さを感じさせる空だった。

「私が生涯を懸けて追い求めていた宿敵。呼吸器官半壊、胃の全摘出という代償を払う事で打倒できた、いや打倒できたと思っていた巨悪」

「オール・フォー・ワン。奴がヴィラン連合の首謀者だ」

「それじゃあ緑谷少年、お大事に」

「はい。ありがとうございます」

オールマイトが帰っていく。ドアが閉まり足音が去っていくのを確認してからデカデカと溜息を吐く。

聞かされた内容は壮絶だった。正直、僕には荷が重い。

——個性を引き継いだからなあ。こればかりはしようがない、義務だと思つとけ  
オール・フォー・ワンについてはオールマイトが必ず倒すって言っていたから心配し

てないんだけど……

——死柄木か

うん。死柄木はオール・フォー・ワンを先生と言っていた。

——つまり奴は俺たちと同じ立場なんだな

……だね。僕たちも死柄木も生徒って立場で、次世代を担う立場にある。

——『君たちの宿敵として死柄木が立ち塞がるかもね』か。不吉な事言ってくれるねえ

……裏谷君。

——どうした

入院しててもできる鍛錬って何があると思う？ あんな話されたからさ、少しでも長い時間訓練してたいんだ。

——……そっか、そうだよな。俺も同じ気持ちだぜ！　ところで、相談したいって言つてたこと憶えてる？

あ。ごめん忘れてた。

——おいおい……

ほ、本当にごめん。で、どうしたの？

——いやね、脳無にやられたあの蹴りについて聞きたいんですよ。……あの時、もしお

前が表に出てたら捌けたか？

僕が？ ……たぶん、できた。その代わりに両腕を犠牲にしてたと思う。

——両腕を犠牲にしたのは俺も同じさ。俺の場合、そのうえで重症負っちゃったしそれは仕方ないよ。旋風鉄斬拳は攻撃主体の拳法で防御には向いていないから。

——けどあの時、腕だけでも出久が使っていたら結果は変わっていたとは思わねえか

それは、まあ……そうかも知れないけど。でもあの時は主導権を交代する時間どころか主導権を分割する時間もなかったし……

——そう。どちらとも一呼吸のタイムラグが生まれちゃう。んで、そのラグは近接格闘において致命的

だから一戦の交代は最低限にしてるじゃないか。

——それじゃダメなんじゃないかって話。今はこれで良いけどよ、今度いつ脳無みたいなのが現れるかもしれない。そうじゃなくてもタイムラグがなければ、もっと気持ち良く戦えると思わねえか

………。

——それに、あー………

どうしたの？

——いや、ね。……前に言ってくれたよな、俺たちは2人で1人だって。アレ結構嬉しかったんだぜ？ だから、その、自分の体なのに自由に動かせないって何かこう……イヤじゃん？

ぷっ、あははははは！

——何わろてんねん！ 何か可笑しい事言った!?

ごめんごめん。ただ珍しく恥ずかしがってるからつい。

うん、じゃあ特訓しよう！ 目指すはタイムラグの消滅！

——よしきた！ でもどうやって特訓するんだ？

え？ そりやもう延々と主導権の変更をするだけでしょ？

——え？ アレ繰り返すん？ アレって少し痙攣するぞ？

うん？ それがどうしたの？ 他にやり方なんて思いつかないよ。

——そうなんですけどね。ただ痙攣してるところを看護師さんに見つかりでもしたら、お医者様がすっ飛んで来るぞ？ 大丈夫？ またマン泣かせたりしない？

……大丈夫！ 根拠はないけど大丈夫！

——そうか！ 根拠はないけど大丈夫そうだな！

数日後、看護師さんに見つかって入院が延期された。

## 閑話：緑谷とクラスメイト

雄英がトップヒーローになる為の登竜門と呼ばれる理由のひとつに充実した設備がある。

ここはトレーニングルーム。最新のトレーニングマシンはもちろん、専門のトレーナーが生徒一人ひとりに合ったトレーニングメニューを組むこともできる本格的なものになっている。

そんなトレーニングルームには1年A組の生徒が何人かがトレーニングに勤しんでいた。

「ぐっ、ぬぬぬ……！」

緑谷出久、バーベルを持ち上げようとしているが中々厳しいようである。

「つしやあ！」

切島鋭児郎、緑谷より重いバーベルを持ち上げている。歯を食いしばり顔を歪めている。

「ふっふっふっふっ……！」

砂藤力道、切島と同じバーベルを持ち上げているが、切島とは違い余裕の表情だ。

「……………」

障子目蔵、声を上げることもなく倍以上のバーベルを持ち上げている。クールガイはトレーニングでもクールであるようだ。

この4人と今はいない飯田天哉と尾白猿夫を合わせた6人が1年A組が誇る筋肉集団。その名もブレインマッスルである。

「つはああ、疲れた〜」

ひと通りのトレーニングを終え休憩にすると切島が声を上げた。それに応えるのは個性で口を複製した障子だった。

「お疲れ、結構辛そうだったな。対人訓練を見るにもつと力があると思ってたよ」

「おお、それは俺も思ったぜ。硬化してるとはいえコンクリート粉碎してんだからな」

「ぐつ、それにやワケがあるんだよ……」

障子の言葉に砂藤が同調する。それに苦い顔で答える切島。

「あはは、それは切島君の硬化は増強型も入ってるからだと思うよ」

「えっ、そうなのか切島」

「おうそうだけ。てかよく分かったな緑谷」

「まあね、小さい頃からプロヒーローの観察して勉強してたから得意なんだよ」

2人の疑問に答えたのは緑谷だった。その答えが当たっていたので驚く切島に緑谷は自分の考察を披露する。

「切島君の硬化は体表を硬くする単純なものだけど、それだけだと普通は動けなくなるんだよ」

「うん？ ……あつそうか、体が硬くなるってことは固まつてることだもんな」

「だから自分で動けるように筋力を増強する系統の個性も入っているんだと思うよ」

ポンツと手を叩き納得する砂藤と絶妙なドヤ顔を見せる緑谷。そんな2人の様子を見て苦笑いする切島。

「お、おうそうだな。だいたい合ってるぜ。付け加えるとすれば関節なんかは他の部分より柔らかいからってのもあるな」

「!？」

「では関節技を仕掛ければ封殺されるのか？ 切島は何か対策しているのか？」

「ああいや、比較的にって話だから硬化してるのは変わらねえから問題ないな」

「そ、んな……。ちくしように!! もっと良く見ておけば……!」

膝を折り床を叩きながら悔しがる緑谷にドン引きしている切島だったが、生来の良い奴スキルを発揮して緑谷に疑問を投げかけた。

「そ、そう言えば緑谷も意外だったぜ。入試での0ポイントをぶっ飛ばしたって聞いて



たから、もっとゴリゴリの奴だと思ってたわ」

「へっ？ ま、まあ僕はどちらかと言えば技でどうにかする派だから」

「いや技でどうにかできる相手じゃなかっただろアレ。俺のシュガードープでもアレには勝てないだろうし」

「あの時は麗日さんにも手伝ってもらったから。僕ひとりだったらあんな上手いかなかったよ」

会話に入らず聞き役に徹していた障子が緑谷と砂藤に声をかけた。

「そういえば緑谷と砂藤は同じ増強型なのに全然違うな」

「うん？ 違うって何がだ？」

「砂藤は分かりやすくパンプアップしてるけど、緑谷はそんな様子は見られないからな。」

「2人には何か違いがあるのか？」

「違いって……」

「言ってもな……」

言葉に詰まる緑谷と砂藤。見かねた切島が質問を重ねる。

「じゃあよ、2人は個性を使う感覚ってどんなもんなんだ」

緑谷と砂藤は顔を見合わせてから砂藤が答えた。

「俺のシュガードープは糖分を摂取することでパワーアップする個性だからなあ。糖分

が筋肉に変化する感覚っていうか、筋肉が膨張する感覚っていうか……。まあそんな感じだな」

「僕の場合はこう、体の中から熱が湧いてきてそれが全身に回ってエネルギーに変換される感覚かな？　力が漲るっていうか……」

「おつ、俺も緑谷と同じだわ」

「切島はそうなのか。俺は砂藤の方に似た感覚だ」

「へえ、増強型つつてもいろいろ違うんだな」

ふと時計を見た切島が声を上げる。

「もういい時間だしここで切り上げるか」

「もうそんな時間なのか」

「結構話していたようだな」

「みたいだね」

トレーニングルームから出て身支度を済ませた面々は帰路につく。

「んじゃ明日学校で！」

「おう！　じゃあな！」

「気を付けてな」

「それじゃあバイバイ」

ひとりで歩く緑谷はふと足を止める。

「同じ増強型でも違う、か」

ちらりとオールマイトの姿が浮かぶ。なぜ今オールマイトを思い出したのか分からない緑谷。考えようとしたところで街に音楽が流れてきたことにより中断させられる。

「えっ!?! もうそんな時間なの!?! やばい母さんが泣き出す前に帰らないと!」

## 雄英体育祭：障害物競争

雄英体育祭。生徒たちが切磋琢磨するイベントであり、プロヒーローが有望株を見つけて睡かける準備を始めるイベントである。

そして、緑谷出久にとって憧れの人物からプレッシャーをかけられた状態で挑む、試合を入れざるを得ないイベントであった。

「第一種目は障害物競走1ー1のクラスが一斉にスタートするからあのゲートでは明らかにキャパオーバーてことはいかに速くゲートを抜けるかがカギになるけど僕たちヒーロー科は後方からのスタートになって僕じゃこの人混みをかき分けて進むのは不可能けどゲートまでの通路の側壁を走り抜ければいけるかもゲートも幅は狭いけど高さはあるから大丈夫ああでも他の人の妨害は絶対あるからそれをどう切り抜けるのかも重要だでもどんな個性なのか分からないし正直すぐ対応できるような注意することしかできないかなでもクラスの皆ならある程度は予想できるかその場合はいったいどんな手で妨害して来るか射程距離のある轟君やかっちゃんや筆頭だけど瀬呂君や上鳴君もありえるかいや上鳴君はデメリットが大きいからそんな広範囲で放電はしないかだと

すると要注意なのは轟君とかっちゃんかあの2人控室でもバチバチだったし危ないっていうか僕にも喧嘩売ってたしホント危険が危ないかもしれない」

——緊張しすぎだ阿呆め

で、でも対策はしっかりとっておかないと……！

——そうだけど、俺らにあるのは単純な増強型の個性に拳法だけ。やれることなんて限られてるぜ？ それに

……それにいつもと変わらないって言いたいんでしょ？ 何があっても対処できるよう全方位に警戒網を張り巡らしておく。

——せやで。お師匠から口酸っぱく言われてることやで

そういうえば最初の頃は型の練習中に視界の外から殴りかかってきたこともあったね。いやはや、アレで周囲に気を配る重要性を知れたよね。

——文字通り骨身に沁みる形でな。あれもしかしなくても虐待だよ虐待、出るとこ出たら勝てるよ俺ら

自分から頼み込んだから負けるんじゃないかな。……ありがと、少しリラックスできたよ。

——いいってことよ

ふう、と一息つく。落ち着いてみればもうスタートのカウントダウンが始まってい

た。いや本当に危ないところだ。もしかしたら出遅れてたかもしれない。

もう一度前にいる生徒の群れを観察する。そうすればさつきは見えなかったものが見えてきた。……………うん、これなら行ける。

『スタートオオオ!!』

一步踏み出すと同時にフルカウルを発動させ、一気にトップスピードまで加速する。

前の集団には狭いが隙間が空いている。詰めすぎると動きづらくなるから開いている隙間だ。僕はその隙間を縫うように駆け抜けていく。

「うおっ！　なんだ!？」

「今なんか緑に光らなかつたか?」

個性を使うと出る謎の閃光を纏いながら進んでいく。すると隙間がないほど人がごった返しているゲート前まで来た。僕はそれを見て右に進路をずらし跳び上がる。跳んだ先にある壁に着地、そのまま重力に逆らうようにして壁を走る。一步踏みしめるごとに壁に蜘蛛の巣みたいな罅が入っているが、まあしようがない。これが一番早いのだ。

「あいつ壁走ってやがるぞ!？」

「ジャパニーズニンジャ！ カラテ！ ワザマエ！」

「忍者つてかただの力技じゃね？ あとそれを言うならアイエエエ！ だろ」

—— 一部クツソ余裕な人がおるんじゃが……

今は自分の事に集中！

不意に白い煙が目に映る。これはアレだろう。予想していたので壁から飛び上がる。すると音をたてながら壁や床が凍っていく。

「あつぶないなあ！」

「避けてるんだから謝んねーぞ」

跳んだ先にいた下手下人、轟君と目が合った。一人ごちただけだったが轟君が反応してきて思わず苦笑い。

—— ホンマ轟きゆんは天然やなあ。それで顔もイケてるとか最強すぎる

ついでに中の人にも苦笑いをしつつ轟君と並走する。

「オレの前に出てんじゃねーよ！ カス共!!」

聞きなれた暴言と爆音を耳にする。もしかしなくてもかつちゃんだ。スタートダッシュが決まったのでかつちゃんの前にいるが、彼女はスロースターターなので直に追いつかれるだろう。

—— それまでに来るだけ距離を稼ぐつてなあ！ つて峰田きょうだい!?

裏谷君の言葉に視線を上に向ける。そこには頬を腫らした峰田君がぶっ飛ばされて  
いるところだった。つて

「み、峰田君!? 大丈夫!?!」

——クソツ、敵は取ってやるからな峰田きょうたけ!

たぶん死んではない。いやそんなことより。峰田君が飛んで行った方とは逆の方向  
を見る。

「アレは、入試の時の仮想敵ヴァイラン!」

——第一関門ってやつか!

すると実況のプレゼント・マイク先生の声が聞こえてきた。

『アレは第二関門仮想ヴァイラン! お邪魔虫が行く手を阻むぜえ! どうにかして突破  
してくれや!!』

——えっ。だ、第二つすか? 第一は何処へ?

たぶんあの狭いゲートがそうなんじゃないかな。最初の節的なアレ。

そうこうしていると進路を塞ぐようにヴァイランが現れた。一瞬も止まることなく跳  
び蹴りで粉碎、着地しようとしたら地面が凍っていて体勢を崩してしまう。

「っ! 轟君か!」

いやらしい妨害をする。おそらく彼の靴にはスパイクでもついているのだろう。走



りにくい環境を作り、他がもたついている間に自分はスイスイ進もうとしているんだ。

——影響なさそうなのは飛んでるかっちゃんくらいかな？ でも残念でした！

そう、こう見えてもバランス感覚には自信があるのだ。さっきのはいきなりだったから対応できなかっただけ、ノーカンノーカン。

——どんな姿勢でも受け流せるようにバランス感覚と柔軟はとことん鍛えられたからねえ。こんなんあつてないようなもんだわ

次々現れるヴィランを鎧袖一触とばかりに蹴散らしながら走っていると、開けた場所に出た。

そこには懐かしのものがあつた。

『あの巨大ロボは入試で使用された特大ヴィラン！ 見た目通りの性能してるから、ちやつちやと突破しつちやつてちよーだい！』

僕が入試でぶっ飛ばした0ポイントヴィラン。それが何体もいる。けど、躊躇することなくヴィランに突っ込む。

『おおっと、一切止まることなく突撃する奴がいるぞお!!? アレはI—Aの緑谷出久に轟焦凍、そして爆豪勝己だあ！ さあさあどう突破するつもりだ!!?』

確かにあの巨体から繰り出されるパワーは脅威だが、その分動きは鈍重だ。動きの先は読みやすい。マイク先生が言うにはかっちゃんも轟君もいるはずなんだけど姿は見

えない。きつと別の個体と対峙しているんだろう。

ただ一人向かって来る僕をロックオンしたらしく、拳を振り上げ殴ってくる。その着弾地点および衝撃が及ぶ範囲を推測し、そのギリギリのところを走り抜ける。土埃が視界を奪うが被害なし。そのままヴィランの股下を駆け抜ける。

隣では爆音と何かが倒れる音が聞こえてくる。案の定簡単に突破したようだ。

『3人とも楽々突破したあ!!』

『だがリードしたのは緑谷だ。爆豪は上に飛び上がったこと、轟はいったん止まって撃破したことで若干タイムロスが出たな。一方緑谷は最小限の動きで回避してほぼ直進、合理的だな。』

僕がリードしてる！ このまま距離を稼ぐ！

しかしそうは問屋が卸さなかった。

——なんだこの地形はたまげたなあ……。これかっちゃん一強じゃね

断崖絶壁にロープ、これを渡って進めつてことか。この距離はフルカウルでも跳んで渡るのは無理、ロープを渡るしかない。

『さあ第三関門だが、これは爆豪有利！ 飛べば関係ねーもんなあ！ それに追隨するのは轟！ ロープを凍らせて滑って進むう！ ついでにロープ破壊して後続の妨害もする！ さつきから妨害してばっかだなコイツ！』

『合理的な判断だ。にしても緑谷は災難だな。ここに来て普通に進むしかない』  
『それでも十分速いけどな！ それ以上にあの2人が速いってことよ！』

っ！ 速く追いつかないと！

——大丈夫、残りの距離から考えてもう1つぐらいは難所があるはず！ そこで挽回すればいい！

しばらく走ると実況が聞こえてきた。もう難所に着いたのかあの2人！

『最終関門は地雷原！ 爆発しても死にはしないが吹っ飛ぶから注意しろよお！』

地雷原！ まだチャンスはある！

——先頭にいるほど地雷を踏む危険が高まる、もたついているだろう間に追いつくぞ！

当然！

地雷原に着くと2人は先に進んでいた。お互いに妨害しているように思ったよりも距離は開いてない。辺りに爆発した跡がないってことは地雷を踏んでいないってことか。にしては結構進んでるけど……。

——いや、よく見てみる。地面の色が少し違ったり盛り上がってるところがある。それで判断してるんだろうな

なるほど。でもこれなら。

「一気に駆け抜ける！」

地雷なんぞ知らんとばかりに激走する。みるみるうちに距離は縮まりそして。

「追いついた！」

「っ！ デクウ!!」

「緑谷……!!」

飛び上がった勢いを足した蹴りをお見舞いする。防がれるものの吹き飛ばすことに成功する。着地した僕に冷気を纏った腕が迫るが左腕を使い外へ逸らす。

僅かにできた間隙について再び走り出す。2人から妨害されない内に少しでも前へ

!

「行かせるワケねえだろ！」

「止まれ緑谷！」

かっちゃんの爆撃しようとする腕ごと逸らし、迫り来る氷を爆散させる。

「っ！ そう簡単にはいかせてくれないか！」

そこからは三つ巴の妨害合戦。抜け駆けさせられないよう妨害し合っていく。進むスピードは亀のように遅く、突き放していたはずの後続が見えるところまで来ている。

『さあさあ障害物競走もいよいよ大詰め！ 先頭の3人は足の引つ張り合いに忙しいみてーだな！ 遅々として進んでねえ！』

『誰か1人が抜けると他の2人から標的にされるからな、迂闊に動けないんだろ。だが、そろそろ誰かが抜けないと後続に追いつかれるぞ』

くそつ、抜け出せない！ 何かないか、何か……。

——よっしや俺の出番だな！ 出久、かつちゃんのアレ拝借しようぜ！

アレ？ ……………ふむふむ。なるほど、なるほど。

「それ採用!!」

強く踏みしめ、2人より一步先んじる。

「採用？ 何を企んでいるのか知らねえけど」

「オレの先行かせるかよ！」

牽制していたが抜け駆けした1人がターゲットにされる。僕を先に行かせまいと手を伸ばす2人。だけどそうはいかない、いかせない。

「勝つのは僕たちだ！」

右腕がひとりでに動き出す。今腕を動かしているのはもう一人の僕だ。右腕が風を起こす。2人の足元に旋風が着弾、地面を僅かに切り裂きその下にあった地雷に届く。

爆発で2人の動きが阻まれる。

『ここで緑谷抜け出したあ!! 地雷をわざと爆破させて妨害したぞ!! なんだあれ個性か!?!』

『いや、それだけじゃないな』

そして僕は2人を尻目に爆風を推進力にして飛ぶ。さらに腕を振るい爆破させる。その爆発をまた推進力にして前に進む。

——見様見真似爆速ターボ！なんちゃって ごめんねかつちゃん！

一度も地面に着くことなく地雷原を抜ける。ゴールとなる会場はもうすぐ目の前だ。後は走るだけ、全力疾走!!

——G O G O G O !!

妨害なんて知ったこっちゃねえと一目散。

B O O O O O M !!

爆発音がした。振り返るまでもない。

「オレのマネか？ ええ……」

彼女が迫ってくる。

「爆風使って！ オレに敵うワケねえだろうがあ!!」

そうだ、これは彼女の技の見様見真似。同じことをしてもかつちゃんに一日の長がある。

連続した破裂音が迫る。確実に仕留める為大技を使うつもりだ。

「死ねやデク!!」

「信じてたよかつちゃん」

予測していた僕はその腕を逸らす。

「んなっ!?!」

そのままかつちゃんのお腹に一撃入れる。

「こんのおっ、クソがあああ!!」

逆にかつちゃんを吹き飛ばし、そのまま僕は駆け抜ける。

吹き飛ばしたことでちょうどいい感じのポジションに来たかつちゃんの腕が爆発して巻き込まれたのはナイシヨの話。

『まさに気炎万丈！ 白熱した戦いを制したのはこの男！ 1年A組緑谷出久だあ!!!』

## 雄英体育祭：騎馬戦（裏面）

そこには惨劇が広がっていた。

むせ返るような血の匂い。辺り一面に飛び散っている血は鮮血色をしている事から、今しがた作られた惨状であることが窺える。平穏な日常では決して作ることができない異様な空気をその空間は漂わせていた。

そこにあるのはたった2つのモノ。

1つは人間だったもの。首を中ほどから断ち切られていて、それが致命傷になったのだろう。それ以外には小さな切り傷が幾つかあるだけの死体。

1つは人間の様なもの。姿かたちは間違はなく人間であるが、それが纏う異常な雰囲気や認識を躊躇わせる。まだ人の姿をした化け物と言われた方が信じられる程だ。

化け物が息を吐く。まるで内に籠る熱を吐き出すように、内に秘めた激情を鎮めるかのように。

「え？ なつ何だよ、これ……………」

日常に戻る唯一の道、この空間で唯一光が差し込む道から現れた男が呆然とつぶやく。言葉の端から理解できない、理解したくないという感情を感じ取れる。



化け物が男を見やる。目が合ってしまった男は体が動かなくなっていることに気が付いた。悲鳴を上げるどころか、指先一本動かせない。殺人犯と現場で力チ会ってしまった恐怖か、化け物の瞳にある狂気に気圧されたのか。

男にとって永遠にも感じた一瞬が過ぎる。化け物は男には興味を示さず奥に続く路地へと踵を返していった。

化け物が完全に姿を消した後、男はへたり込んだ。そこでようやく自身の呼吸が荒れていることに気づく。呼吸すら止まっていたらしい。

「そ、そうだ。ヒーロー、ヒーローに連絡しなきゃ……………」

震える手で携帯を操作する男。コール音を聞きながら、男は益体も無いことを考えていた。

果てして、あの化け物に勝てるヒーローは存在するのだろうか？

ここはプロヒーローであるインゲニウムの事務所。今は昼休憩中のその場所にはインゲニウムこと飯田天晴が昼食を取っていた。彼だけでなく、事務所で働く多くのサイドキックもいる。チームプレイを重要視しているインゲニウムが昼食は皆で食べる

ルールを作っている為だ。

かなり広めに作られた部屋なのだが、サイドキックの数が多い為に手狭に感じる。部屋に備え付けてあるテレビでは雄英体育祭の中継が流れていた。第一種目の障害物競争が終わったいま、テレビの中では第二種目の騎馬戦が行われていた。

この場で話題になっているのは2つ。

1つは第一種目でトップを取ってしまったが故にピンチになっている少年の事。逆境に立たされているはずの少年は笑顔を浮かべている。大物なのかマゾなのか、不毛な議論が交わされていた。結論として家の事務所で指名して直接確かめよう、になったらいい。

もう1つはメガネをかけた大柄な少年、飯田天哉の事。何を隠そうこの飯田少年、インゲニウムの実弟なのだ。やはり自身がサイドキックを務めるヒーローの弟なのだ、気になる。めっちゃ気になる。

「ああ！ 惜しい！ 今のは惜しかったよ天哉くん！」

「あの超スピードに反応できるなんて、あの緑谷って奴とんでもないな」

「くうううう！ 何か悔しいわ！ ね、インゲニウム!？」

サイドキックの1人がそう問い掛けてインゲニウムを見る。するとそこには空の弁当をつつき、空気を咀嚼するインゲニウムの姿があった。

「あ、あの〜？ インゲニウム？」

空気をつまみ空気を食べる。空気をつまみ空気を食べる。空気をつまみ空気を食べる。――

「目エ覚ませインゲニウムウウ!？」

斜め45度。壊れた機械を叩き直す由緒正しい方法で雇い主をぶん殴るサイドキック。正気に戻ったインゲニウムは恥ずかしそうに頭を掻きながら言葉を発した。

「いや悪い悪い。天哉がここまで成長してたのに驚いてな」

「弟なんですよね？ 仲悪いんですか？」

「まさか！ 兄弟仲は最高にいいよ」

「じゃあどうしてまた」

「ここしばらく忙しかっただろ？ だから暫く家に帰れてないんだよ」

ああ、とげんなりした表情を見せるサイドキック一同。確かにこの数か月は目の回るような忙しさだった。有名になった影響で仕事がひっきりなしに舞い込んでくるのだ。なまじ人数がいる分、行動範囲が広いことも原因になっている。

「それじゃあ、久しぶりに見た弟を見てお兄ちゃんはどう思いますか？」

ニヤニヤしながら尋ねたサイドキックの言葉はからかいても含んでいた。それに気づかずインゲニウムは答える。

「そうだ、な……。すごく成長したと思うよ。……………天哉、頑張ってるんだな」

慈しみに満ちた表情をするインゲニウムを見た一同は、質問したサイドキックの脇腹に集中砲火を仕掛ける。真面目なシーンなんだから変な質問するな。無言でそう言われているサイドキックは口に虹が架かりそうになっている。

「よっし!!」

膝を叩いて立ち上がったインゲニウムが高らかに宣言する。

「天哉に負けないように頑張らないとな！ 兄として情けない姿は見せられないぜ!! 見回り行ってくる!!」

やる気になったインゲニウムは休憩返上で働きたいらしい。サイドキックたちは困ったものだと言顔を合しながらも笑った。こういう人だからこそ、自分たちはここにいるのだと。インゲニウムに続こうと立ち上がった時、部屋の扉が慌ただしく開け放たれる。

「たっ大変ですインゲニウム!!」

ただ事でない空気を感じたインゲニウムは空気を変えて問うた。

「何があった」

「保須市でプロヒーローの斬殺体が発見されました!」

「!?!」

サイドキックたちが騒めく。プロヒーローが殺されたなど大事件だ。

「それと、目撃証言から推測するに犯人はヒーロー殺しだと思われませう！」

「ヒーロー殺し、ステインか」

纏う空気を完全に戦闘モードに変えたインゲニウムは号令をかける。

「全員で取り掛かるぞ。まず周辺住民の避難誘導、現場周辺の地理を確認、そこから想定される逃走ルートの検索、及びその誘導を。分かったな！」

『はいっ!!』

「じゃあ行くぞ！ 殺人鬼をとっ捕まえる!!」

「見つけたぞヒーロー殺し!!」

そう言つて鎧を纏った人物が化け物の前に降り立った。

「俺はインゲニウム！ ヒーローとしてお前を捕まえるぞ殺人鬼!!」

「ハア……」

ヒーロー殺しが手に持っていた抜身の刀をインゲニウムに向ける。

「犯罪者を捕まえるのは警察がいれば事足りるんだよ……」

切っ先がユラユラ揺れている。それは、ヒーロー殺しの心情を表しているように感じ

られる。

今にも爆発してしまいそうな炎の揺らめき。

「ハア……。やはり、偽物。ゴミムシは幾ら潰してもウジャウジャと出てくる」

「何を言っているか分らんが、詳しい話は署で聞こうか!!」

腕にあるインゲニウムの個性、エンジンが火を噴いた。高速で接近し渾身の右ストレートを放つ。

しかしそれは上に跳んで躲かされてしまう。足でブレーキをかけながら、すぐさま振り返り姿を確認する。

目の前にヴィランの顔があつた。狂気に満ちた双眸がドロドロと光る。

「お前も、肅清対象だ」

再び、惨劇の幕が上がる。

## 雄英体育祭：決勝トーナメント 緑谷 V S 心操

雄英体育祭第二種目である騎馬戦は熾烈な争いだった……………。

——みんな目え血走らせながら襲ってきたもんね

唯一の救いはねちっこく襲って来ると思っていたかつちゃん、B組の人をロツクオンして中々こつちに来なかったことぐらいか。

——1人だったら即行でボコボコにできただろうに。何であんな時間かつたんだろうな

あはは……。騎馬戦はほら、チーム戦だから。かつちゃんの個人技だけじゃ勝てなかつたんだよ、チーム戦だから。

——遠回しに協調性ないって言っていない？

言っていない言っていない。そんなこと言ったら爆破されるから言っていない。

さて、真面目なことを考えよう。じきに決勝トーナメント一回戦が始まるんだから。

——しかも第一試合って大役だしな。緊張でハマすんなよ？

し、しないって……………。

そこで僕たちがいる控室のドアが開かれた。そこに立っているのはクラスの中でも

仲のいい人物。

「あれ？ どうしたの尾白君？」

僕は今決勝トーナメントの舞台の上に立っている。プレゼントマイク先生が何か前口上をいって場を盛り上げているようだが耳には入ってこない。それほどに集中している自覚がある。

——………………。なあ、ホントにやるのか？ 正直、分の悪い賭けだぜ

百も承知さ。

—— だったら！

でも、ごめん。

—— ……はあ。相変わらずのきかん坊で何より。まったく誰に似たんだかうん、ごめんね。それからありがとう。わがままに付き合ってくれて。

—— 今更だつての。俺たちや一心同体一蓮托生だろうが

『第一試合、始め!!』

開始の合図。まず僕がやったことは構えることでなく、足を動かして接近することで



もなく、口を動かすことだった。

「心操君、君の個性について尾白君から聞いたよ。正に初見殺し、凄い個性だ」

「……ちつ、あの猿か。で？俺の個性を知って尚、お喋りでもしてくれるのか？」

心操君は舌打ちした後、皮肉気に顔を歪ませながら僕に問いかけてきた。

心操君の個性は洗脳。彼の問い掛けに答えた者を操るといふ強烈な個性だ。

だから、もう僕の答えは決まっている。

「もちろん、そのつもりだよ」

瞬間、意識が遠のく。それに伴い、体と心が離れる感覚がする。体の自由が、利かな

くなる。

「……………何だこいつ。真性の馬鹿か何か？ まあいい、楽な試合だったよ。……そ

のまま場外に出ろ」

そう僕に命令する心操君。僕の体は——

「断る!!」

その命令を無視して一歩進む。先ほどまでの感覚はもうない。

「……………は？」

心操君はポカンとした表情をしている。気持ちは分からないでもない。

「っ!! 止まれ!!」

「イヤだ！」

再度の感覚。しかし、それはほんの一瞬だけですぐに解ける。それを確認した僕はもう一步踏み出す。

「!? な、何でだ!! 何で俺の個性が効かない!? どんな手を使ってやがる!!」

「そんなの決まってる！」

半狂乱になって叫ぶ心操君。叫び返す僕に三度目のあの感覚は無かった。

「心の中での喧嘩は慣れてるから！」

そう、つまりそういうことである。

—— いやどういうことだよ

試合前に僕たちのところに来た尾白君は騎馬戦で心操君に洗脳されていたらしい。そんな尾白君が言うには、彼の個性である洗脳は対象人物の精神に作用するものらしい。根拠は騎馬戦の記憶が無いこと。もし体の主導権を奪うだけなら意識はあってもいいはずなのに、そうではなかった。意識が遠のき、フワフワした心地になったらしい。尾白君が言ってきたことは一つ、絶対に答えるなということだった。精神なんてあやふやなものを弄られては抗うすべがない、だから絶対問い掛けには答えるな。

だが、こちらそんなあやふやなモノで喧嘩したことなんて数えきれない程ある。何ならついこの間も、それ関係でビチビチしたばかりだ。あれは大騒ぎになったなあ……。

——小さい頃は俺との喧嘩が絶えなかったからな。心の中でマウントとるのに慣れてんだらうよ

とまあ、そういうこと。

裏谷君も言っていたが、分の悪い賭けだった。心操君の個性に対する考察が間違っていればアウトだったし、よしんば合っていたとしても洗脳に打ち勝てるかどうかは分かんなかった。けどまあ結果打ち勝ったから問題ない。

「くそっ！ ワケ分らないこと言いやがって！」

僕の生い立ちを知らない心操君からすれば、僕は大層理不尽な輩だろう。自分の個性が効かないうえに、それが訳の分からない方法で破られたのだから。

けど僕には好都合。彼には言いたいことが沢山あるのだ。これで憂いは無くなった！

僕は走って心操君に近づいていく。

今の僕は拳を振り上げていて、今から殴るぞオ！ と全身から言葉を発している。

それを分かっている心操君はもちろんガードする。が、甘い。ガードには隙間が空い

ており、僕はそこに拳をねじ込み心操君をぶん殴る。

顔にクリーンヒットを貰った心操君は派手に吹っ飛び、ゲホゲホとせき込む。

僕はそんな心操君に声をかける。

「嫌味に聞こえると思うけど、僕は君を尊敬してるんだ」

「っ！ 確かに、嫌味な野郎だ……！」

憎らし気に僕を見る心操君。分かってたけどちよつとショック。この想いは紛れもない本心なんだ。届けこの想い！

—— 気持ち悪いよ

うるさいよ。

「ここまでの活躍見てたよ。良い個性じゃないか、俺のと違って……！」

立ち上がりつつ心操君は言葉を吐き捨てた。

「良いよなあ、お前は恵まれてて！ 俺はこんな個性だからスタートから遅れちまったよー！」

ああ、心操君。その気持ちは——

「分からないだろ！ おあつらえ向きの個性を持つてて！ 望む場所に行ける奴にはよ

！」

「分かるよ」

「つ！ どこまで馬鹿にすれば気が済むんだ！ ええ!？」

「分かるよ。僕は無個性だったから」

「……………は？」

「中学3年の春に個性が発現したんだ」

「……………いや、あり得ない。個性の有無はもつと幼い頃に——」

「本当だよ。なんなら役所に行つてみる?」

心操君は僕の言葉に呆然としている。まあ荒唐無稽な話だからむりもないかな。

僕はさらに言葉を重ねる。彼にどうしても言いたいことがあるのだ。

「無個性だった頃からヒーローを目指していたんだ、もちろん本気で。…………だから分かるよ、周りからお前には無理だつて言われる辛さは」

自分の掌を見る。そこには僕たちが積み上げてきたモノが傷という形で現れている。

「さつき君は僕の事を恵まれてるつて言つたよね。そう、僕は恵まれた。ヒーロー向きの個性を授かったし。何より、僕の夢を後押ししてくれて一緒に歩んでくれてる人がいる。…………僕は本当に恵まれた」

立ち直つた僕を陰ながら支えてくれた母さん、僕の夢を理解して本気で鍛えてくれた師匠、僕には過ぎた力を受け継がせてくれたオールマイト。そしてここまで二人三脚で、彼が言うところの二人羽織で頑張つてくれた裏谷君。

「だから、僕は君を尊敬するよ。この恵みがなかったら、たぶん僕はここにいないから」  
皆がいなかったら僕はどうなっていただろうか。ヒーローは目指してたと思うけど、心のどこかで諦めていたと思う。

「何度も挫折したはずなのに、普通科にいるのに、君は決勝トーナメントにいる。諦めず  
にここまで来た！僕は君を、君のその心の強さを尊敬してる！」

皆がいなかったら僕はあそこまで努力できただろうか。もしかしたら、入試の仮想  
ヴィラン相手に足が竦んで動けなかったかもしれない。本当の僕は弱虫で泣き虫だか  
ら。

「だから君に見て欲しい。無個性だった僕の努力を、僕たちの研鑽を！」

「無個性だった？ ……個性は使わないってか？」

「うん。僕が君と同じだった時の僕を見て欲しいんだ」

「……随分舐めたマネするじゃねえか」

「それでも勝つ自信があるからね。こう見えて僕、結構強いよ？」

「はっ！ いいぜ見てやるよ。でもな、その隙に俺が勝つ！」

叫んだ心操君が走る。彼は勢いそのまま僕の顔面に殴りかかってくる。

僕はその様子を見て、顔面で受け止めた。

当然のようにクリーンヒットする拳。鼻血が出たのか口元にぬめり気を感じる。で

もそれだけ。よろめくことも、のけ反ることもしない。

「な、んで。効いてない……?」

そう言つて心操君は数歩後ずさる。そんな彼を見て僕は言う。

「なんでつてそりや——」

今度は僕から距離を詰める。

「腰が入つてなかつたからね!」

クリーンヒット。彼は勢いよく後頭部を地面に打ち付けた。

「HEYYYYY! なんだ今のテレフォンパンチ、やる気あんの!」

「ぐ、っそ! 舐めやがつてえ!」

突進して拳を繰り出してくる。詳細は分からないが、多少は鍛えているらしい。でも逆に言えばその程度。文字通り死にかけながら鍛えてきた僕なら余裕で避けられる。

現に彼の攻撃は一切当たっていない。

「くそっ! 当たりやがれ!」

「それは出来ない相談だね!」

大ぶりの攻撃を外し隙ができる。

「だから腰が入つてないって!」

心操君の脇腹をぶん殴る。リバーブロー気味になったそれに、彼は呻きながらフラフ

ラよろめく。

「攻撃の時に腰を腰を回して！ 肩から先を内側にねじりこむように殴るんだ！」

「う、るせえよ！」

再度の拳。余裕をもって避ける。耳の近くを通過したそれは風を切る音を残した。思わず口の端がつり上がる。

「何笑ってやがる！」

「さあ！ 何でか、な！」

「ぐふっ!？」

僕の拳が鳩尾に突き刺さる。

しかし彼は踏みとどまり僕の腕をつかみ取った。

「なっ!？」

「お望み通り——」

腕を引っ張られ体勢を崩してしまふ。心操君の拳は強く握りしめられていた。

「——腰入れて殴ってやるよ!!」

今までで一番重い拳が迫る。

「流水」

僕はそれに手を添える。力の向き、力の流れを僅かに外にずらす。



心操君の渾身の一撃は僕の頬を掠めていく。

「岩」

左腕を後ろに引く。

「砕」

僕の強みであるしなやかさ。多少無理な体勢でも十全に技を放てる。

心操君の顔を見る。彼の眼はまだ諦めていなかった。

ああ、やつぱり君は凄いなあ……。

「拳!!」

攻撃と同時に踏み込む。

踏み込みの強さで技の重さは増す。僕の踏み込みは地面に罅を入れていく。その重さが増した拳は、増強型の個性ではない心操君にはキツイものだろう。

「っ、っ！ がはっ……」

膝をガクガク震わせながら、今にも倒れそうになりながら、彼はまだ諦めていない。

「おれは、まだ……っ！」

しかし、体はもう限界だったのだろう。気を失い倒れた。

『心操君気絶！ よってこの試合、緑谷君の勝利!』

『いや〜！ 1回戦から熱い戦いだっただなあ!!』

『ああ、そうだな。……しかし心操人使、か』

『あん？ どうした？』

『いや、ただ——』

—— お疲れ出久

うん、お疲れ様。

—— 最初の一撃避けろよなあ……

あはは、ごめんね。ちよつとカッコつけすぎたかな？

………ねえ裏谷君、気づいた？

—— 気づいたって何が？

心操君の攻撃のこと。

—— ああ、それね。もちろん気づいてるよ。段々と重く、鋭くなつてたな

うん、そうなんだ。

僕は退場する足を止め、担架で運ばれていく心操君を見る。

——何笑ってるんだよ出久

え？

——え？ つてお前、嬉しそうに笑ってるだろ。試合中にもニヤけてたし。

……………そうだね、ただ——

『——あいつは強くなる。それこそヒーロー科の連中を脅かすぐらいにはな』  
「——うかうかしてたら追い抜かれそうだから。頑張らなきゃって思ってたね」

## 雄英体育祭：決勝トーナメント 麗日 v s 爆豪

雄英体育祭決勝トーナメント一回戦も残すはあと2試合となった。

控室に備え付けてあるテレビを覗み付ける少女が1人。金髪に赤目、高校1年にしては発育した肢体。魅力的な体に劣らない整った美貌、目つきが悪いのが少々マイナスだが非常に絵になっている。まあ口を開けばその全てを爆散させる罵詈雑言の嵐になるのだが。

決勝トーナメント出場者、爆豪勝己である。ちなみにとある人物にだけは嵐が止むともつぱらの噂。

爆豪が見るテレビでは第六試合が終わったところだった。対戦カードは常闇踏陰 v s 轟焦凍。開始早々ダークシャドウを突撃させる常闇、対する轟は会場の半分を覆う程の大規模攻撃を繰り出しダークシャドウごと常闇を冷凍し瞬殺。第六試合は僅か数秒で幕を下ろした。

「……………」

第七試合がダブルノックアウトしたのを見届け、爆豪は控室を出て試合会場に向かう。道中で考えることは2つ。

1つは轟焦凍のこと。あの大規模攻撃は誰から見ても過剰なもので、事実試合後常闇とダークシヤドウに謝っている様子が中継されていた。実は第七試合が始まる直前、会場に向かう轟とぼったり出くわしている。挑発じみた激励を受けてイライラしたことを思い出し舌打ちを溢す爆豪。あの場で会った時は普段通りの様子だったが、試合では見るからにキレていた。別れてから試合が始まるまでの僅かな時間で何かあったのだろうか。

……いや、おそらく自分の父親が原因なのだろう。トーナメントが始まる前に轟と緑谷の会話を盗み聞きしてしまった爆豪はそう考える。事実そうだ。轟パパが息子のトラウマスイッチをONにしてしまい、轟ジュニアは見事プツンしてしまったのだ。ちなみにトラウマスイッチとは轟パパの存在そのものであるともっぱらの噂。

もう1つはにつっきアンチクショウ緑谷出久のこと。あの舐めプ野郎は無事一回戦を突破した。自分がぶつ殺せるチャンスが掴まれなかったことに喜びと安堵の溜息を吐いた爆豪と、それをニヤニヤ見るA組女子陣の様子が見られたらしい。爆豪と緑谷は対戦表の両端にいる為、戦う舞台は決勝になる。そこに辿り着くには苦難が待ち受けているが、爆豪は緑谷と相まみえることを疑っていなかった。

——何せデクは私が認めた男だ。アイツが決勝に進出することは間違いない。そして私は最強なので優勝が確定している。つまり決勝戦は私対デク……！

「やつとぶつ殺せるなあ……!」

対人訓練で対戦することが無く、結構モヤモヤしていた爆豪は頬を赤く染めつつ壮絶に嗤う。

一回戦最後の試合、第八試合は麗日お茶子 v s 爆豪勝己。両者共に会場に上がっており、女子生徒同士の対決とあつてか会場のボルテージは今日一番になっている。その圧に爆豪は舌打ちをし、麗日は苦笑いしつつ頬を搔いた。

プレゼントマイクによる選手紹介が続く中、麗日が爆豪に声をかける。

「ねえ爆豪ちゃんちよつとええ?」

「あ? なんだよ丸顔」

丸顔で……、とシヨックを受けた様子を見せる麗日は咳払いしてから質問した。

「爆豪ちゃんつてデクくんと幼馴染なんやんな?」

「……そうだよ。それがどうした」

「……2人つてめっちゃ仲良しやし、やっぱそういう関係なん?」

「……………は?」

たつぷりとポカンとした間抜け面を晒した爆豪は顔を真っ赤にして反論する。

「だつ誰と誰がどんな関係だつてえ!? つかそもそも仲良しでもねえわ殺すぞ!」

言葉は汚いが、普段の爆豪からは考えられないほど声の棘が丸くなっている。

微妙に早口になったその言葉に麗日はウンウンと一人頷き、こう言い放った。

「わかつとる、わかつとる。……………やから、余計に負けたくない」

「—————」

再度の間抜け面。

爆豪は思う。自身とこの女には歴然とした差がある。いたつて冷静に考えて、この試合は勝ち試合だ。証拠に先ほどの道中、この試合について考えることはなかった。控室で充分なシミュレーションをしたから。

正直この女が何を言っているか分からない。分からないが取り敢えず——

「ぶつ殺す」

『第八試合、始め!!』

麗日が走る。触れたものを無重力状態にする個性を持つ麗日は接触する為にひたすらに走る。手の届かない距離から爆撃されるだろうが構わない、むしろそれも作戦の内

である。

そんな麗日の考えとは裏腹に爆豪は爆速ターボで急接近した。

「えっ!? 嘘!?!」

「現実見ろやクソが!」

予想外の行動に反応できない麗日は至近距離で爆撃を受ける。大きく吹き飛ばされた麗日の耳にまたもや爆発音が聞こえてくる。転がる視界の中で空を飛びながら向かって来る爆豪が見えた。立ち上がれない振りをして充分に引きつけ確実に接触する作戦を思いつく。

作戦通りに爆豪が手の届く距離に来る。痛みでうずくまる振りをしていた麗日は素早く腕を前に突き出した。

「っ!」

「甘えわ!」

爆豪は下に向かって小さな爆発を起こす。その上で突き出された腕を左手で押さええる。勢いを殺さずそのまま右手で右ストレート。殴った反動で減速する爆豪と後ろによろめく麗日。

「死ねやあ!」

爆豪は押さえていた左手で後方に、殴った右手で右方向に爆風を起こす。巧みな体捌



きで進行方向を調節、麗日の左頬に爆豪の蹴りがクリーンヒットした。

「ゲホッ！ 痛つつ……！ 流石爆豪ちゃん容赦ないなあ！」

蹴りで床を転がされた麗日は立ち上がりながらそうぼやく。

「何だ、手加減して欲しいのかよ」

「冗談やない！ そつちのが屈辱や！」

「なら問題ねえな」

軽口を叩く2人だが思考は先ほどの動きを反芻していた。

爆豪の容赦のなさは確かに厄介だが、それ以上に化け物染みた反射神経が脅威だ。タ  
イミング的には確実に接触できたはずだった。それを見てから避けられた。接近戦で  
は敵わないことを改めて痛感し笑みが零れる麗日。

そんな麗日を見て爆豪は麗日の評価を上方修正する。重い一撃を見舞ったはずだが、  
相手は好戦的な笑みを浮かべている。ここまで打たれ強いとは予想外だった。

『負けたくない』

試合が始まる前の麗日の言葉がフラッシュバックする。原因不明のイライラを舌打  
ちという形で抑え込む爆豪。思わず突撃してしまっただが、シミュレーションでは相手の  
間合いの外から一方的に攻撃する予定だった。爆豪は当初の予定通りに遠距離からの  
爆撃を始める。

回避できずに爆風に晒される麗日、その姿が煙で見えなくなるまで爆撃は続く。

爆豪は煙が回り一面に広がったのを見て攻撃を止める。ダメージは与えただろうが、これで倒せたとは考えられない。警戒する爆豪の目に黒い人型が映る。

「はっ！ 煙に紛れて奇襲つてかあ!？」

急接近するその影を爆撃し吹き飛ばす。

「バレてちゃ奇襲の意味ねえよクソが！」

「知つとる!!」

「っ!？」

煙が晴れ麗日が姿を現す。黒色のタンクトップ姿の彼女を見て、先ほどの影が個性で飛ばされた体操服だったことを察する。

「クソが！」

「届けえええええ!!」

手を限界まで伸ばし触れようとする麗日。

麗日にとっての千載一遇のチャンスはしかし、爆豪に前腕を掴み取られることで潰える。

「っ!? これでも、届かんのか……!」

手を伸ばし過ぎて姿勢を崩していた麗日は一方的に殴られる。

顔へのパンチ、脛を強打されてからの鳩尾に突き刺さる前蹴り。後ずさり距離が開いたことで爆破。吹き飛ばされ麗日は無様に床を転がっていく。

「隙をついたとしても、素人の攻撃を受けるほどヤワな鍛え方してねえよ」

麗日を見下ろす爆豪はそう言い放つ。

麗日は痛みで動けなかった。もとより実力差があることは理解していたが、ここまで有効打を与えることができず一方的な展開になっていることに精神的ダメージを負っている。

絶望的な状況。まるで走馬灯のように思い浮かべたのは少し前の場面だった。急襲したヴィラン相手に果敢に立ち向かい大けがを負ったクラスメイトとの会話。

『え、裏谷君に? もちろん良いよ。ちよつと待ってね』

『うし、お見舞いありがとお茶子ちゃん。んで、俺に用って一体なんだい?』

『何で脳無に立ち向かえたのか?』

『うーん……。初めに動いたのは出久だしなあ……。』

『戦ってる時怖くなかったのかって?』

『そりやもちろん怖かったよ。できる事なら逃げ出したかったね』

『それでも戦った理由？ ……………正直よく分からないよ』

『そ、そんな目で見ないでください……』

『——たぶん、たぶんだけど』

『痛いし怖いし逃げ出したかった、けど』

『それでも譲りたくないモノがあったから立ち向かったんだと思うよ』

「っ！」

——そうだ、そうだった。私は、私も……！

「私も、裏谷君みたいに……………！」

震える脚を抑え込み立ち上がる。入試の時、彼に助けられた時から憧れていた。自分にはできないことをやってのける、あの姿に。

瞳に炎を宿した麗日は爆豪に向かい走り出す。

「馬鹿の一つ覚えかよ」

容赦なく麗日を爆撃する。あれだけポロポロならこれで充分、もう爆豪の勝利は揺る

がないだろう。会場の誰しもがそう思った。煙から走り出してきた麗日を見るまでは。

「なっ!?!」

吹き飛ばされ地に伏してもおかしくはない一撃だった。しかし麗日は歩みを止めない。

「ならくたばるまで爆破してやるよー!」

再度の爆破。しかし麗日は止まらない。

三度みたびの爆破。しかし麗日は止まらない。

痺れを切らした爆豪は連続して爆撃する。しかしそれでも、麗日を止めることはできなかった。

「クソっ! どうなってやがる!」

幾ら爆破しても止まらない麗日に爆豪は思わず叫ぶ。

もうすぐそこまで麗日は接近している。

今まで両腕で顔をガードしていた為に顔が見えなかったが、近づいたことで顔が見えた。

圧倒的な劣勢、絶望的な状況にあつて尚、麗日は笑みを湛えていた。どこかの誰かの様に。

「プルス、ウルトラアアアアアアアア!!」

「さっさとくたばれええええええええ!!」

今試合一番の大爆発。会場の床が何枚も捲れ上がる。黒煙が立ち込め  
伸びてきた手が爆豪の腕を掴んだ。

「っ!!」

すぐさま振り払おうとするも異変に気づく。体が思い通りに動かない。体がフワフワする。空中にいる時の感覚とも違うそれに上手く体が動かないのだ。

混乱する爆豪の胸倉を掴む腕があった。良い笑顔をした、麗日お茶子だった。麗日は爆豪を掴んだまま更に走る。

「ク、ソがああ!!」

走る走る、助走をつける様に麗日は走る。

「勝あああああっつ!!」

目一杯助走をつけて爆豪を投げ飛ばす。無重力状態の爆豪は物凄い速さで場外へと飛んでいく。

足をもつらせ転ぶ麗日。しかしその顔は嬉しそうだ。格上相手に勝ったのだから。これで憧れの人に一步でも近づけたから。

しかしそれでも。

BOOOOM!!

爆豪勝己は天才だった。

「——え」

爆音、そして急に影が麗日を覆った。呆然と見上げる。

そこには両手を突き出した爆豪がいた。

「そ、んな——」

視界に映る小さな爆発と破裂音。そして、油断なく麗日をみる爆豪。

「くたばれ」

大爆発、会場全体を黒煙が覆う。

爆豪は無重力状態から解放され会場に着地した。

——危なかった

普段と違う無重力に慣れるのに中々苦労した。もう少し慣れるのが遅かったら、なす  
すべなく場外に出ていただろう。

黒煙が徐々に晴れていく。爆心地には倒れ伏す麗日の姿があった。

「……………」

構えて様子を窺う爆豪。何度も予想外の行動をした麗日に特大の警戒をする。事実、麗日は僅かに動いていた。爆豪に向かうように、這いずって。

「私も……………、私も、まだ……………っ！」

油断なく構える爆豪に手を伸ばす。痙攣して、フラフラしながらも確かに伸ばされたそれは、やがて力尽き地に落ちた。

『麗日さん行動不能！ 爆豪さん二回戦進出!!』



## 雄英体育祭：決勝トーナメント 緑谷 VS ——

眉間にしわを寄せ歯を食いしばりながら、彼は拳を振るってくる。威力の乗ったそれを僕は左腕を使つていなす。すると彼の腕の陰、僕から見て死角になつていゝところから追撃を放つてきた。人の胴回りより太いそれを喰らえばダメージは必至。一度いなしている為、腕は使えない。

それでもなお、僕には届かない。

上半身を右に捻る。受け流すために使い後ろに流れていた左腕がそれに触れ、受け流す。そして捻つたため引いた形になつた右腕を腰の回転を加え、彼の鳩尾に叩き込む。

「疾ッ！」

「っ!？」

僕の攻撃をまともに喰らつた彼は大きく吹き飛ぶ。しかし怯んだ様子を見せず、寧猛な笑みを浮かべながらこちらを見てくる。

「さ、すがだな。緑谷……!」

「そつちこそ。今のは少しヒヤツとしたよ、尾白君」

決勝トーナメント準決勝第一試合。尾白君との試合は熾烈な近接戦闘となつた。

『さあさあ！ 盛り上がってきたぜ緑谷 V S 尾白!!<sup>バーサス</sup> なんか、2人とも達人って感じだな!』

『達人ってのは言い過ぎだ。確かにそこいらのプロよりは良いだろうが、まだまだ粗い部分がある』

『あん？ あー、そういやお前も接近戦には一家言あるんだったな』

『俺は見る専門だがな。自分でやるのはからつきしだよ』

『んなもんでもいいっての！ でダイレイザー、この試合どう思う？』

『……そうだな。正直、趨勢は歴然としている』

『マジか!?!』

『ああ。というか、それぐらい少し考えれば分かるだろ』

『分からん!』

『……はあ』

相澤先生の言う通り勝負は決まりつつある。尾白君は戦い方が上手で、強烈な尻尾攻

撃がいつ飛んでくるかに気取られると確かな修練を積んだ拳が叩き込まれる。どっちも注意しなくちやならないのは近接戦闘で大きな負担になる。

——目の前に相手がいるってだけで圧迫感があるもんなあ。それに加えて死角からの嫌らしい攻撃。神経すり減っても仕方ねえって

僕たちは慣らされたから大丈夫でしょう？　ともかく、尾白君は強敵だ。二回戦で当たった瀬呂君とはワケが違う。

——瀬呂はなあ……。俺との相性が絶望的に悪かったとしか……………

テープをスパスパ斬りつつ近づいてそのままボコボコにしたもんね……。終わったあとのドンマイコールが凄かった……………。

そんなことより尾白君だ。

かなり手強い尾白君だけど、事を有利に運んでいるのは僕たちだ。授業では苦戦したけど、あの時とは状況が違う。あの時は室内で、尾白君は壁や天井を使って三次元的な動きで翻弄してきた。あのアクロバティックな攻撃に苦戦していたけど、この試合会場には壁も天井も存在しない。平地での戦闘を強いられる形になるのは僕にとってプラスになった。

——尾白は戦況を作るのは上手いけど、技の練度は俺たちのが上。選択肢が少ないつてのは読みやすいってことで

尾白君の個性は尻尾。強靱な尻尾が生えているだけの個性。尻尾が生えているだけっていうのは動きが読みやすい。

——尻尾があつたら当然こう動くよなつてのがあるからな。それを補うための手段も封じられてるし、俺たちが有利なのはまあ当然の帰結つて話だ

うん。現に僕たちは無傷で、尾白君しかダメージを負つてない。大きいものは入つてないけど、小さいダメージが積み重なつて結構なものになつていゝ。けど、なあ……。

——あー、やつぱ出久も不安か

だつてねえ………。尾白君、人畜無害そうな顔してめちや頑固だし。この前の組手の時もピンチになつてからが強かつたし。てか目がイッチやつてたし。

——今の尾白の目はあの時の目と同じだな

だから怖いんだよ。

さて、このまま受け流しつつチクチク攻撃すれば十中八九勝ち拾えるけど……。

——んじやそうするか？

冗談！

地面を強く蹴り前進する。どうせ勝つなら気持ち良く勝ちたい。

——自分の勝利を疑つてないのはいいけど、あんま油断すんなよ

この試合で初めて自分から前に出る。虚を突かれた尾白君に一瞬の隙ができた。僕

はその内に間合いを詰め終え拳を振るう。ギリギリでガードされるが、その腕を掴み引き寄せる。

「んなっ!」

「しゃああ!」

姿勢を崩しながら空きになった胴へ一撃、怯んだところを逃さずに連撃を見舞う。最後に顔面に強烈な一撃を見舞う。よろめく尾白君だったが、鼻血を撒き散らしながら反撃して来る。

「流水岩碎拳の本領は——」

迫る左拳に合わせる様に右拳を振るう。尾白君より内側に振るわれたそれは左拳の軌道をずらしつつ相手に迫る。

「攻防一体にある!!」

右拳が頬に入る。モロに喰らった尾白君は後ろに倒れこんだ。

『緑谷の強烈な一撃が決まったあゝ!! これは勝負あったか?!』

『いや』

——まだ行けるってか

かなりのダメージを蓄積してるはずなのに、尾白君は何事も無かったかのように立ち上がる。口の中を切ったらしく血を唾のように吐き出している。

……ちよつとカッコいいかも。

少し気を抜いてしまったのがバレたのか尾白君が急接近してきた。そのまま手を振り上げたのでその軌道と着弾点を予測、さつきと同じように受け流しながら攻撃しようとし――

尾白君の姿が消える。

「!? しまったフェイント!」

勘で下を向く。体を地面スレスレまでかがめた尾白君がそこにいた。

両手足を地面に着いたその姿から次の手を予測する。上半身を起こしての拳か、蹴り上げてくるか、あるいは全身のバネを活かして跳びかかってくるか。

そう無意識で予測している僕の視界に線が入り込む。

「――ッ」

腕をクロスして防御。なんとか間に合うが腕の骨がみしみし悲鳴を上げている。

「重――っ!」

そのまま上空へ高く打ち上げられる。痛みに顔を顰める僕の耳にパンツと音が聞こえてきた。

――出久!

裏谷君が警告してくれるも時すでに遅く。僕は両腕を尾白君に捕まれ動ける状態に

なかった。

「くっ！」

「やっど、一発!!」

体ごと前に回転させて尻尾を振るってきた。僕は歯を食いしばって衝撃に備える。顔面に衝撃、内臓が急降下する感覚がする。

「んがっ」

後頭部を地面に強打してしまう。視界が揺れる。

「これで決める！」

——後方に跳躍！ 来るぞ！

指示に従い飛び上がる。視界はまだ戻らない。

連続して音が聞こえてくる。重い何かが地面を砕く音か……？

「冥躰——」

——んだありや!? 地面に足を打ち込みながら……ってそうじゃねえ！ 水月右打ち上げ！

「——震虎拳!!!」

ズンツツと一際大きい音が鳴り響く。視界が戻った僕の目に迫り来る右アッパーが映る。腕が裏谷君の指示に反応して動いている。しかし、どう見ても決め技なそれを片手で捌くのは不可能だ。

尾白君のアッパーと僕の左手が重なり合いそして————尾白君の腕から血が噴き出した。

「ぐっ!?!」

「ごめん尾白君」

———そういうのは脳無戦で対策済みなんだよ！

右腕を大きく引き絞る。

脳無との戦いで反省した僕たちは1つ猛特訓したことがある。それがタイムラグの短縮だった。脳無戦の二の舞にはなるまいと訓練した今は切り替えにコンマ一秒以下まで縮んだ。今回、受け流せないと判断した僕は左腕だけ裏谷君に動かしてもらった。流れを逸らすのでなく、流れを殺す方向にシフトチェンジしたのだ。

お返しにこれでもかと強く踏み込む。

「流水岩砕拳」

「舐めるなア!!」

尾白君が反撃する。一拍遅れて放たれたそれはちょうどカウンターのようになって



いる。

——あ、やべ

このままではカウンターをもらつてしまう。

すると右手の指がひとりでに動き出した。風を切る音を立てながら動くそれは旋風を起こす。その風が尾白君の腕と顔に這いずり、そして血を噴き出させた。

怯んで動きを止めてしまう尾白君。僕はこのチャンスを逃すことなく拳を振りぬく。骨を砕く感触。尾白君は吹き飛び地面を転がつていき——場外に出たところで動きを止めた。

審判であるミッドナイト先生が駆け寄つていく。尾白君の容態を確認した先生は腕を上げ高らかに宣言した。

『尾白くん戦闘不能！ 緑谷くんの勝利！』

歓声に包まれる中でミッドナイト先生は担架を呼んでいる。最後の一撃は骨を砕く会心の一撃だった。

でも、それよりも出血が酷い。

裏谷君の旋風鉄斬拳は威力が高すぎて人に向かって使えない。手加減すればなんとか使えるが本気には程遠い。

それに今回は咄嗟に使つた為に加減ができなかった。結果、尾白君は血濡れになつて

いる。

「あ、あのミッドナイト先生！ 付き添ってもいいですか！」

「ええもちろんよ」

クラスメイトを血の海に沈めてしまった。その事実が重くのしかかる。何かできないかと考えた結果、思いついたのが付き添うことだった。

尾白君が目覚ましたら謝れるように。

「緑谷君」

ミッドナイト先生に呼び止められる。振り向くと先生は優しい顔をしていた。

「あんまり気にしちやダメよ？」

「……はい」

「うっ、ぐ……！！ ……ここは」

「尾白君！ よかった目が覚めたんだね！」

医務室に運ばれてすぐ尾白君は目を覚ました。

「緑谷？ てことは……は……医務室、か」

「そうだよ。尾白君試合中、派手に出血して、それで——」

言つて気分が沈んでしまう。

「? どうした緑谷」

「……ごめん、尾白君。大事はなかったけど、結構なケガだった」

「……………」

リカバリーガールのお陰で尾白君には傷一つない。でもケガを負わせたことを無かつた事にはできない。

「はあ、緑谷」

「えっ。ど、どうしたの」

ちよいちよいと手招きする尾白君に従い顔を寄せる。

「ふんっ!」

「あいたあ!」

思いつきり殴られた。グーで、顔面を。

「何するの!」

「うおおおおお……………」

「しかも痛がつてる!」 ちよ、大丈夫!」

治つたのは切り傷だけで打撲や骨折はまだ癒えていない。そんな状態で動いたから痛みでうずくまっている。

「あ痛たた」

「本当に大丈夫？」

「大丈夫、だいじょーぶ。そんなことより緑谷！」

「はっはい」

「お前は気にしすぎ。俺は大丈夫だよ」

「……そうは言っても」

「あのな、アレくらいはの怪我なんて何度も経験してる」

「え!? あんな出血を何度も!？」

「詳しくは覚えてないからアレだけどそんな出血したことはない。あっても吐血ぐらい」

「思わず半目になってしまふ。」

「——ぶははははははは！ さっきから言ってること滅茶苦茶じゃねーか！ こいつこんなキャラだっけ!？」

「微妙な顔をしている僕を見た尾白君は苦笑いしながら言葉をつづけた。

「ごめんごめん。でもちよつとは気が楽になったろ？」

「そりゃあ、まあ」

「あんまり思い詰めないでくれると俺としてはありがたい。……それに、手加減できな

かったってことは、それだけ追い詰めたってことだろ？」

「それはもちろん！ もしカウンター貰ってたら結果は違ったかもしれないよ！」

「だろ？ じゃあ悔しきこそあれど、恨みなんてないよ」

「尾白君……」

尾白君が拳を突き出した。

「次は勝つぞ緑谷」

「……いや、次勝つのも僕だよ」

そう言つて僕の拳を尾白君の拳に合わせた。

その時の尾白君は眩しいくらい笑顔だった。

## 雄英体育祭：決勝トーナメント 轟 v s 爆豪

尾白君との試合に勝った僕は決勝戦に進むことが決まった。観客席に行く時間が無いため医務室から出た足で控室に向かつてる。

次の試合当たるのはどっちなのか。かっちゃんか、轟君か。

——2人とも実力派だからなあ。どっちが勝ってもおかしくねえぞ

その通りだ。最初の授業こそかっちゃんの一方的な展開だったが、あれから時間も経っている。体育祭に向けて鬼気迫る表情で特訓する轟君の姿も報告されている。

……それに、轟君にはあの事情がある。今の彼なら何があってもおかしくない。

「あ」

「ああ？」

歩いているとかっちゃんに出くわした。

「かっちゃん？ ああ、もう試合会場修復されたんだね。流石セメントス先生、仕事が速

い」

「……」

「えーつと……。そ、それじゃあね！ 試合頑張つて！」

人前に出してはいけない表情をしているかつちゃん。試合前に馴れ馴れしすぎた。かつちゃんでもナーバスになることもあるんだろう、そつとしておこう。そそくさと脇を通り抜けようとする僕にかつちゃんが話しかけてきた。

「デク」

その声之余りにも真剣だったから、声を出すことも忘れ振り返る。

するとかつちゃんと目が合った。赤い瞳、強い意志に煌めく美しい瞳。

「オレを見てろ。次勝つのも、お前に勝つのも、この私だ」

そう言い放ち去っていく。

——勝己ちゃん一人称私に戻ってたな

「……」

——どっちが勝ってもおかしくねえって言ったけど訂正。次の試合、勝つのは爆豪

勝己だよ

轟と爆豪が対峙する試合会場は今日一番の盛り上がりを見せていた。どちらも強力かつ派手で見栄えのいい個性、氷と爆発の対決はさぞ見ものだろうと会場は熱気に包まれている。

そして相対する2人。轟は親でも殺されたかのような表情を、爆豪は人でも殺しそうな表情をしている。

『なんか、アレだな！ どっちも人前でしちやダメな顔してるな！』

『ちやかすな山田』

熱気と声援に包まれるなか、主審のミッドナイトが開始を宣誓。

直後、最大威力で氷塊を生み出す轟。爆豪は予測していたのか相殺すべく大爆発を起こした。

轟音に次ぐ轟音。氷塊と爆発が衝突し辺りに衝撃を撒き散らす。

黒煙と爆風、そして飛び散る氷の礫に顔をかばう轟。相手の位置を大まかに予測、再び氷を出そうと足に力を込める。その瞬間、煙を切り裂き爆豪が迫ってきた。

咄嗟に壁を作りガードする。しかし、それを飛び越すように爆破で上昇する爆豪、さらに爆破を推進力にして飛び蹴り。モロに貫ってしまった轟は吹き飛ばされるが、バク転を繰り返すことですぐさま態勢を立て直す。

爆豪はなおも迫る。地上に降り立ち格闘戦に持ち込む。拳撃や蹴撃を見ても爆豪の格闘技センスは良いものだ。並の相手では文字通り手も足も出ないだろう。だが轟はそれ以上だった。拳撃は避けられ、蹴撃は受け止められる。爆豪の迫撃は轟には届かない。そして轟は反撃に出た。



風を切りながら振るわれる縦拳。それを爆発で上に回避する。轟は黒煙で相手を見失ってしまふ。爆豪はその隙を逃さず頭を掴み、そのまま地面に叩きつけた。ついでに爆破することで追撃と同時に距離をとる。

『なっ、何という試合！ 開始直後から目まぐるしく戦況が変わっていく！ リスナーはこれちゃんと思えてんのか!?!』

『リスナーに見えるワケねえだろ』

爆豪は油断なく黒煙を見つめている。だからこそ猛スピードで迫り来る氷柱を回避できた。黒煙が吹き飛ばされ、周りの床を凍らせた轟の姿が現れた。爆発で上空に逃げられる氷柱が殺到する。大小大きさの違うものを混ぜフェイント、時には真下から急襲する氷柱も織り交ぜた波状攻撃を爆豪は完璧に回避する。縦横無尽に上空を翔け、止まらないことでの的を絞らせないようにしているのだ。

「だったら、これで！」

右手を床に叩きつけると、5つの氷筋が迫る。すると爆豪を取り囲むように氷柱が生えた。これには爆豪も動きを止めてしまふ。そして轟は右手を勢いよく振り上げる。するとその動作と同時に5つの氷柱の中心から特大の氷柱が突き出てきた。

ゴウツと空気を貫きながら迫る氷柱だが、直撃する前に爆豪は足止め用水柱の間を抜けて事なきを得る。床を滑りながら着地する爆豪と警戒しつつ息を整える轟。

『すげーっ！ どっちもすげーっ!!』

『ラジオパーソナリティーが語彙力死なせてどうすんだよ』

『でも実際凄くないか!?!』

『……まあな。あの速度と規模で氷を生み続ける轟は個性の習熟度が高いな。1年であそこまでできる奴はそういねえ』

『だな！ 正直俺が1年だった時より強エよ！ でも爆豪も凄くねえか?!』

『ああ。上空を飛び回る技術もそうだが、何と言ってもさっきの氷柱を回避した動きだな』

『おおあれか。あれは当たったと思っただぜ』

『普通なら直撃だよ。……確かに本命を放つ前に僅かな時間があった。とはいえ、その間に脱出ルートを見つけ出し掠りもせずには抜け出した。動体視力がどうという以前にとんでもねえ戦闘勘だ』

「はあ、はあ」

吐く息を白くしながら轟は右腕を数回握る。

——思っただよりも霜が少ねえな。……爆炎で融けたか

轟の個性には使用限界がある。限界に迫ると全身に霜が降り、動きを鈍らせる。だが今はそれが普段より少ない。爆発の熱で融けているのだ。しかしそれは相手の攻撃を

喰らっているということ。喰らえば個性の限界は遠ざかるが、反対に体力の限界が近づく。

——なるべく早く勝負をつけたい。が、どうすれば攻撃が当たる。デカイのは確実に避けられる。かといってチマチマやつてもさつきみたいに——

そこで観客席最前列にいる人物が視界に入った。常人より二回りは大きな体格、腕や顔から炎を揺らめかせるその姿。

No. 2 ヒーロー、燃烧系ヒーローエンデヴァー。轟焦凍の父親であり、轟焦凍がこの世で一番憎む人物。

その姿を捕らえ、頭に血が上っていく。

——クソッ！ さっさと終わらせてやる！

冷静さを無くし攻撃を仕掛けようとしたが、その直前に爆豪が動いた。爆発で滑空し始めたのだ。

「またか」

毒づくも状況は変わらない。空を飛ぶ影を捕らえようと狙いを定めていると、爆豪が加速した。

「何!?!」

『おおっと！ 爆豪ここで加速したぞ?! 何で!』

『氷柱を使ったな。舞台に残る氷柱を足場にして蹴ることで加速しているんだよ。とはいえ——』

『速すぎんだろオイ!? 心なしか残像見える気がするんだけど!』

上に右に左に下に。氷柱だけでなく床も蹴り上げることで更に加速する。もはや狙いを定めるどころではなく、目で追うだけでやっつとだ。

すると一際大きな爆発音がした。左斜め後方、轟の氷が一番対処しにくい場所だ。反撃は出来ずとも防御だけはと振り向く轟。

そこには殺気振り撒く赤があつた。

「!?!」

突然の事に身を竦めてしまい対処が一呼吸遅れる。そして、その一呼吸で彼女には十分だった。

「死ね」

轟音。次いで熱と衝撃。無様に転がりようやく止まった頃によく痛みが体を襲う。

「ぐっ……!」

顔が特に熱い。顔面にクリーンヒットしたのだろう。だが、このくらいは慣れていゑる。チラつく父の姿に黒い感情を出しつつ前を見やる。そこには息を切らした様子も

ない爆豪が立っていた。

相変わらず酷い顔だ。一体何がそんなに気に食わないのか。

「……………」お前は何でここに居るんだ」

「な……？」

爆豪はより一層顔を歪めて飛翔する。彼女のボルテージに伴い爆発は大きくなり後ろの床がめくれ上がる。

「ここにはヒーローになりたい奴が集まってんだよ！」

「近づけさせねえ……………」

繰り返される氷結をジグザグに飛び回避、轟に迫っていく。

「オレもデクも他のモブ共も！ になりたい理想があるからここまでやってんだよ！」

個性の過剰使用で痛む腕を無視して轟に肉薄する。

「叶えたい夢があるから！ になりたいヒーローがあるから！ 死に物狂いでここまで来た！」

「ッ！」

至近距離。拳を振り上げる姿を見て轟は氷の壁を作る。爆豪は止まることなく拳を叩きつけた。

拳から血が舞い、骨に衝撃が浸透する。爆豪の一撃は壁に罅を入れるも崩すには至ら

ない。痛みに歯を食いしばり反対の腕で壁を爆破する。

黒煙が2人を包み込む。近くに居ても相手の姿が見えない中、轟は距離を置こうと後退する。しかし伸びてきた腕に胸倉を掴まれた。

「テメエは何でここに居る！ 何でヒーローを目指してんだ！」

頬を殴られ吹き飛ばす轟。倒れることはなかったが肩で大きく息をする。殴られた頬を拭うと血が付いていた。自分の血ではない。氷壁を殴った手で殴られたのだろう。

「テメエが見てんのはヒーローになった自分の姿じゃねえ。見てるのはその後ろ、テメエの親父の姿だ」

「——あ？」

頭の中が真っ白になる。それもすぐにどす黒い感情に塗りつぶされ、怒りで顔がこわばる。

轟が父親との確執を話したのは緑谷だけ。では緑谷が爆豪に話したのか？ いや、そんな事をする人物ではない。だとすれば。

「——盗み聞きか」

「はっ。あんな所で話してんのが悪いんだよ」

手を強く握りしめる。感情が高ぶるにつれ辺りに冷気が立ち込める。同時に轟の体に霜が降り始めるが気づいた様子はない。

そんな姿を鼻で笑う爆豪は言葉を重ねる。

「親父を見返したい？ 親父の鼻を明かしたい!? ははっ！ ヒーローよりもおあつらえ向きのやつがあるじゃねえか！」

そこで轟が弾かれたように走り出した。感情が表に出にくい彼にしては珍しく、怒りを露わにしながら猛烈な勢いで迫る。

振るわれる拳を半身になって避ける。しかしそれも織り込み済みだったようで、腕が伸び切る前に顔に掴みかかる。それを爆豪は腕で防いだ。

爆豪の左腕が凍てついていく。轟の体には更に霜が降り、寒さから息を白くする。

爆豪の個性は掌から分泌される汗を起爆するものだ。腕を凍らされ冷やされれば汗を分泌することはできない。個性の半分を封じられた爆豪はしかし動じることはなかった。

「そんなに親父が憎いんだつたら——」  
手を握りしめ大きく振りかぶる。

「——ヴィランにでもなつてろや！」

個性の使い過ぎで動きが鈍っていた轟はろくに動くこともできず、鳩尾に重い一撃を貰ってしまう。

衝撃そして浮遊感。

床をゴロゴロ転がってようやく爆撃されたことを認識する。意識が朦朧とする中、轟は手をつき立ち上がろうとする。

「お前にもあっただろう!!? なりたい自分が!」

——うるさい

声に出せずとも思う轟。爆豪は部外者だ。轟のことを良く知りもしないで説教染みた言葉をかけられても気を悪くするだけ。轟の心には響かない。

——でも、誰かが、何か大切な事を言っているような……………

いつかの記憶が蘇る。何時の記憶か、何処の記憶か、誰との記憶か、曖昧なことが大部分を占めている記憶。分かることは唯一つ。

——とても優しく温かい……………

『いいのよお前は』

力が少しだけ湧いてきた。足が動く、手が動く。なんとか体を起き上がらせる。

「なりてえもんちゃんに見ろ!!」

『血に囚われることなんかない、なりたい自分に』

『なっっていいんだよ』



心の残り火が炎に変わる。

『こ、これはく!? 急に炎が巻き起こるう! 爆豪は堪らず後退!!』

『轟のもう一つの個性! あいつ、この土壇場でやりやがった……!』

堰を切ったように激しく燃え上がる炎。人の何倍もの高さのあるそれは高熱を周囲に撒き散らす。

「俺だって——」

炎の中から人影が姿を現す。右半身に氷を、左半身に炎を纏わせたその姿。

「——俺だって、ヒーローに!」

熱で霜が溶け、気化してゆく。顔の部分にあつた霜は気化せずに水滴となって頬を流れ落ちていった。

それはまるで涙のように。

「はっ! クソ熱いんだよ半分野郎」

口の端を吊り上げて爆豪が吐き捨てる。そこに今までの怒りはなかった。

「爆豪……ありがとな」

「はあ? オレは言いたい事を言っただけだ。……それで喜ぶとかお前まさか……」

爆豪の勘違いに苦笑いする轟。そして決着をつけるために強く踏み出した。

「どうなっても知らねえぞ」

「上等！」

轟が最大威力の氷塊を繰り出す。炎の熱によつて勢いを取り戻したそれは猛然と爆豪に迫っていく。

試合開始時と同じように相殺することは不可能と判断した爆豪は上空に飛翔し回避する。

轟の左腕が動き出す。炎が激しく燃え盛る。炎が地面を舐め凍てつく床を融解させていく。

「お前は言いたい事言っただけかもしれないねえけど」

轟の目は爆豪を追う。風にたなびく金糸の髪を、爛々と輝く瞳を、勝気な笑みを。

「ありがとな……爆豪」

加減を知らない超高熱の火炎が解き放たれる。

「しゃらくせえ！」

迫る炎に爆豪は迎撃を選択。個性の限界か腕から少し爆発が漏れ出る。痛みも限界も忘れ去り、最大爆発を引き起こす。

火炎と爆発が衝突しそして――

――会場を半壊させる爆発を生み出した。

舞台は土台ごと亀裂が入る。審判のミッドナイトはもちろん、散らばっていた瓦礫や水柱が吹き飛びながら粉々になっていく。観客席では雄英バリアが発動し爆風から観客を守った。

『……………お前のクラスどうなってるの?』

『散々冷やされた空間に火炎と爆炎のダブルパンチだ。空気が急速に熱されて膨張したんだ』

『それでもこの威力はオカシイだろ!? 威力がデカけりやいいつてもんじゃねえぞ!』  
会場全体を包む煙で舞台の様子はうかがい知れない。会場にいる全員が固唾をのんで見守る中で煙が晴れる。

そこには左半身の体操服を焼失させた轟が息を切らせて立っていた。

『立っているのは轟だあゝ!! 爆豪は…………アレ? どこ行つた?』

舞台の上に姿はない。かといって場外にもいない。

肩で息をする轟に影がかかる。顔を上げると爆豪がこちらに向かって落下していた。  
『なんと爆豪も健在だあゝ!! 上に逃げてたのが功を奏したか?!』

『加えて自分の爆破の反動で更に上空に飛んだんだろうよ。あの大爆発が起こるのを見越してな』

爆豪が上空できりもみ回転を始める。ぐんぐん勢いを増しながら突撃する爆豪。

轟は顔に笑みを浮かべる。音を立てて足元の床一面が凍結していく。  
「爆豪おぉ!!」

最後の力を振り絞り絞り氷柱を差し向ける。爆豪と氷柱は瞬く間に接近。  
衝突、果たして氷柱だけが砕け散った。  
轟の胸元に爆豪の手が届く。

「榴弾砲着弾」  
ハウザーインパクト

榴弾が炸裂した。

「ぐえっ」

痛みが限界に近かった爆豪は着地に失敗。呻き声を漏らすも轟の姿を確認するため、慌てて顔を上げる。

黒煙が晴れる。

崩れ落ちた会場の側壁、その中に気を失っている轟がいた。

『と、轟君場外！ よって、爆豪さん決勝戦進出！』

ババアの汚いブーゼ音が響く。

「これで良し。少しキツめにやっといたから次の試合までには回復してるよ」

「……………」

「まあ、あれだけ派手にやったんだ。会場の整備に時間がかかるだろうし、それまでゆっくりしてな」

「……………」

リカバリーガールの声に全く反応しない爆豪。無視しているといった様子ではなく、単に聞こえていないようだ。

膝に肘を乗せ指を交差させ組み思案顔をみせる。いわゆるグンドウポーズだ。

そんな爆豪を見てリカバリーガールは考える。

「そんなに緑谷が気になるのかい？」

「ブフオ!？」

思いつきりむせた。数度せき込みリカバリーガールに抗議の声を上げる。

「なっ何でオレがクソデクなんかを気にしなきゃならねえんだ!？」

「おや違うのかい？ 決勝戦の相手だ、てつきりその対策に頭を悩ませてるもんかと」

「なっ、う、ぐう……………。そーだよ」

「…………何で言い淀んでるんだい」

「ぶち殺す相手として気になってるだけで他意はねえ！ 他の事で気になってるとかねえからな?！」

「ははは、わかったよ」

「じゃあそのニヤケ面止めろや!!」

ケツと椅子に座りなおす。頬を赤くしていたがそれもほんの少しの間だけ。また思案顔に戻っていった。

「……………」

「そんなに苦戦する相手なのかい？ 個性の相性ならお前さんの方が有利だろう」

「……個性の相性なんて、そんなもんクソほどの役に立たねえよ。アイツの強さはもつと別のところにある」

「ああ、そう云えばお前さんらは幼馴染だったね。じゃあ色々詳しいってワケかい」

「……ああ、そうだな」

爆豪が掌を見る。白くて指は長いが個性の影響から皮が厚い手だった。

——アイツの手とは大違いだ

「オレが一番詳しいよ。アイツとは幼稚園からずっと、それこそクラスまで一緒だった。だから、アイツのことはオレが一番よく知ってるよ」

——そうだ。オレが一番近くで見ってきた。アイツが挫折した時も、立ち直った時

も、血が滲むような努力をしている時も。

「文字通り死に物狂いで鍛錬を積んでたこと、本気で夢を追い続けてること、アイツが真つすぐ前を向いて歩いてること、全部全部知ってる」

手を強く握りしめる。

「だからこそ、私は勝ちたい。アイツに、出久に勝ちたい！ 誰かを助ける貴方を助けられる、隣に立っていられるってことを証明したい！」

「ふむふむ、なるほどなるほど。いやあ青春だねえ」

「油の切れた機械のような動きで顔を上げ、リカバリーガールを見る爆豪。

「……………ろ」

「うん？ どうしたんだいそんなアホ面して。女の子がそんな顔しちゃいけないよ」

「今すぐ忘れろ！ クソババアア!!」

「えー」

「こ、んの…………！ 忘れろすぐ忘れろ今すぐ忘れろ!!」

「この年で頭が鮮明つてのが密かな自慢だね」

「こんの老害キス魔があ!!？」

「お邪魔しますリカバリーガール。さっきの試合で吹き飛ばされちゃって……つてえええええ!! 何してるの爆豪さん!! いやちよ、待つて! 待つてつて爆豪さん!! ああもう強制的に眠らせるわよ!!？」